



→
現在の虫掛駅。左側線路は桜並木のサイクリングロードに、右側線路は藤棚になっています(平成25年3月26日撮影)



筑波線(下)

旧制土浦中学生たちは、毎年「春の筑波登山」の帰途に筑波線を利用してきましたが、土浦一高生たちは、「秋の歩く会」で、出発地までの輸送手段として、筑波線に何度かお世話になってきました。今号は、「歩く会」での一高生と筑波線の関わりを紐解いてみます。

筑波鉄道 1979(昭和54)年

筑波線は、1979(昭和54)年、関東鉄道の分社化により、筑波鉄道として再出発し、様々な合理化を行っていききました。しかし、経営は好転せず、1984(昭和59)年には、とうとう沿線自治体に事業廃止を申し入れています。

土浦一高生たち、こうした筑波鉄道の窮状を少しでも助けようとしたのか、1979年以降、歩く会での筑波線利用が目立ってきます。1979(昭和54)年(北条く不動峠くパープルラインく青年の家く学校)、1981(昭和56)年(北条く不動峠く辻く青年の家く学校)、1984(昭和59)年(筑波東中く北条大池く不動峠くパープルラインく青年の家く学校)、1985(昭和60)年(筑波東中く太田橋く東大通りく筑波大グラウンドく栄小く桜川堤防く学校)と、廃止までの8年間の間に、4回も利用しています。

1984(昭和59)年の歩く会については、長津博樹氏(高38回卒、当時2年生、鉄道愛好クラブ員)が、ご自身のホームページ「常陸野鉄道写真館」のなかで、次のように述べています。

「1984年11月12日、茨城県立土浦第一高等学校の恒例行事である『歩く会』に参加する生徒輸送のため、土浦―常陸北条間で団体臨時列車(復路は回送)が運行された。編成は岩瀬方からキハ505+キハ811+キハ11+キハ511+キハ762+キハ812の6連で、前後には同高の鉄道愛好クラブが作成したヘッドマークが取り付けられた。」

当時、私は同クラブのメンバーで、滅多に見られない6両編成に記念ヘッドマークを付けようということになり、筑波鉄道本社との打ち合わせやヘッドマークの製作を担当した。私にとっても高校時代の良き思い出となった。本画像アップにあたり、学校内の許可などに

尽力いただいた同クラブ顧問の吉沢先生ならびにヘッドマーク取付に因って快諾のうえご協力いただいた筑波鉄道関係者の方々にあらためて御礼申し上げます。



常陸北条駅に到着した臨時列車「土浦一高歩く会」号(1984.11.12)(上)。ヘッドマークは本校鉄道愛好クラブ(鉄道研究部の前身)の長津博樹氏の力作(左)

このヘッドマークについては、鉄道愛好クラブ(1973年に必修クラブの鉄道愛好クラブとしてスタート、1985年に鉄道同好会、1989年に鉄道研究部に昇格)内でヘッドマーク取り付けの提案がなされたのがきっかけとなりました。顧問の吉澤中正先生に筑波鉄道に打診をしていただいた後に、長津氏はじめ、2年生のクラブ員が真鍋機関区を訪れ、詳細を協議のうえ、取り付けの許可をもらい、製作したものです。長津氏は近所の看板屋さんにベイスとなる丸いベニヤ板を切りだしてもらい、旧本館でイラストを描き上げたそうです。後日、真鍋機関区に持ち込み、筑波鉄道にある既存のヘッドマークに貼り付け、キハ505とキハ812に取り付けてもらいました。

臨時列車「歩く会」号は、真壁発土浦行の普通列車に、真鍋機関区で土浦方に5両の回送車輛を増結し、土浦まで6両で運行。土浦駅(8時30分発)から生徒を乗せて、常陸北条駅(ダイヤより10分遅れの9時10分着)まで快速運転、途中

停車駅は新土浦駅だけで、常陸北条に着後、ただちに真鍋機関区に回送されています。

この年の歩く会の前日、11月11日(日)には、上野から筑波への直通臨時列車「筑波号」が運転されています(上野発8:43、筑波着10:47、筑波発15:10、上野着17:50)。12系客車6連で、全車自由席のため普通乗車券だけで乗車することができました。長津氏はこの「筑波号」にも乗車しており、1984年11月11日、この「筑波号」に土浦から筑波まで乗車した。当日は曇天だったせいもあり、乗車率は非常に悪く、今後運転されるのか心配していたら、案の定、翌年からは「筑波号」が設定されなくなり、1987年には筑波鉄道が廃止されたため、この日が「筑波号」最後の運転になってしまった。と述べています(ホームページ「常陸野鉄道写真館」)。



常磐線内はEF80やEF81が牽引し、筑波線内は筑波鉄道のDD501が牽引する上野発の直通臨時列車「筑波号」。ヘッドマークは「つくば」。最後の雄姿となった1984(昭和59)11月11日の筑波駅

翌1985年には、筑波鉄道の廃止が現実のものとなつてきており、「歩く会」実施にあつた(コース決定のための)アンケートには、筑波鉄道利用の筑波「コース」の特色として「有力な情報筋によると、(筑波線は)12月までの令らしい。(このコースは)筑波鉄道を利用します。幻の6両編成で最後を飾ってあげようではないか!」との筑波線へのせつない思いが綴られています。その思いが全校生徒に通じたのか、

2年連続での筑波線利用が実現しました（ちなみに土浦～北条間の団体旅客運賃は35万円余で、生徒一人あたり約350円でした）。11月12日（火）の「歩く会」当日（11月13日が茨城県民の日で学校は休みのため、歩く会は11月12日が恒例でした）、ディーゼルカー6輛編成（岩瀬方からキハ504・キハ812・キハ761・キハ11・キハ511・キハ505）が幻から現実のものとなり、8時すぎに土浦駅に入線。ホーム長の関係で土浦駅では後ろ4両に乗り。土浦駅を8時22分に発車し、ほどなく新土浦駅に到着。ここでは前2両に乗り、8時32分発。満員の土浦一高生を乗せた臨時列車「歩く会」号が常陸北条駅（8時56分着）までの筑波線を快走しました。前年同様、前後の車輛（キハ504・キハ505）には、鉄道愛好クラブ製作の「歩く会」ヘッドマークが取り付けられました。キハ504、キハ505は、常総筑波鉄道（当時）が発注し、1959（昭和34）年に日本車輛製造東京支店で新製された車輛です。キハ504、キハ505を前後に配し、ヘッドマークで飾ったのは、筑波鉄道社員の車両たち（とくに自社発注車）への最後の饒であつたのでしょうか（鉄道愛好クラブOB久保田高広氏（高33回卒）によれば、キ



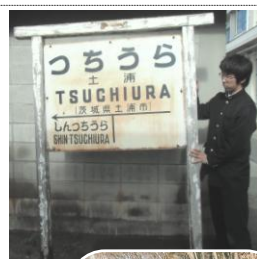
坂田付近を快走する「土浦一高歩く会」号。窓を開け、自然の風を満喫している生徒が見えます（上）。このときに作製された「ヘッドマーク」（左）



ハ504、505には、正面中央にヘッドマークを掛ける金具があるので、筑波鉄道の配慮で編成の両端に配し、ヘッドマークを取り付けたと思われるとのこと。前述の長津氏は、吉澤先生の車に乗り、沿線各所で「歩く会」号を待ち受け、最後の晴れ姿をカメラにおさめています（この時の写真も『常陸野鉄道写真館』にアップされています）。その後、沿線自治体が、1985（昭和60）年10月1日からの一年間、回数券3割補助などの助成を行うことになり、12月までの命はとりとめました。乗客は増加せず、1987（昭和62）年3月31日の運行を最後に、翌4月1日に廃止となりました。奇しくも、国鉄分割民営化と同じ日でした。

現在筑波線の廃線跡は、ほぼ全線がサイクリングロード（つくばリッピンロード・岩瀬土浦自転車道）となっており、新土浦駅や虫掛駅など、駅のホーム跡がわずかに筑波線の名残を伝えています。車輛では1985年（昭和60）年に廃車となったキハ461（鉄道省キハ4100形式気動車、国鉄で廃車後、遠州鉄道、北陸鉄道を経て、関東鉄道筑波線にやってきました）が愛好家によって、つくば市さくら交通公園に保存されていますが、日本初（1933年製造）の本格的な大型ガソリンカーであり（ガソリンカーは出力が小さいことと、火災の懸念によりディーゼルエンジンに移行していききました。キハ461も製造時はガソリンエンジンでしたが、その後ディーゼルエンジンに換装されています）、数少ない貴重な車輛として、現在は大宮の鉄道博物館に展示されています。また、国鉄土浦駅の駅名板が本校弓道場裏に保存（？）されています。これは土浦駅ビル新築の際に、土浦駅ホームの改築も行われ、不要となった駅名板を、

当時鉄道愛好クラブのクラブ員であった秋田秀樹氏（高39回卒・ラグビー部でも巨漢FWとして活躍していました）が譲り受け、リヤカーに載せて運んできたものです。



本校に保存されている「土浦駅」駅名板（右）。廃車後に真鍋機関区に留置されていたキハ461（左下）。この車両はその後旧国鉄色に塗り替えられ、つくば市に展示されています（右下）



気動車車輛記号

キ・・・ディーゼルエンジンを動力とする車両（運転室の有無は区別しない）
 キク・・・エンジンはないが運転室がついている車両
 ハ・・・普通座席車、厳密には普通車。普通寝台車は「ハネ」。おおもと「ハ」が一等車、「ロ」が二等車、「ハ」が三等車でした。

1984・1985「歩く会」号

編成車輛の履歴書

キハ504・キハ505（キハ504型）

1959（昭和34）年、日本車輛製造東京支店で新製された片側片開き2ドア、両運転台の18m級気動車でセミクロスシート、空気バネ台車。常総筑波鉄道（当時）発注車。

キハ761・キハ762（キハ760型）

1957（昭和32）年、雄別鉄道の新製車。1970（昭和45）年、雄別鉄道の廃止により譲り受ける。

キハ811・キハ812（キハ810型）

1962（昭和37）年、雄別鉄道の新製車。寒冷地仕様のために、側面の窓が小さい。1970（昭和45）年、雄別鉄道の廃止により譲り受ける。

雄別鉄道

北海道釧路市釧路駅から釧路市阿寒町の雄別炭山駅までを結んでいた鉄道路線（雄別本線）などを運営していた炭鉱鉄道会社。雄別本線をはじめ、鶴野線・埠頭線・新釧路構外側線を所有・運営していました。すべて軌間1067mm、全線単線・非電化路線でした。また雄別炭礦直営の尺別鉄道路線（尺別・尺別炭山間）も石炭輸送・沿線住民の輸送に活躍していましたが、尺別炭鉱の閉山に伴い、同じく1970年に廃止されました。

キハ511（キハ510型）

1963（昭和38）年、江若鉄道の新製車。1970年、江若鉄道の廃止（1969年）により譲り受ける。

江若鉄道（こうじやくてつどう）

琵琶湖西岸に沿って滋賀県大津市の浜大津駅～膳所間2.2km、浜大津～近江今津間51.0kmを結んでいた鉄道路線。当初は「近江」と「若狭」を結ぶ路線として計画されていました。この計画は1974（昭和49）年、JR湖西線山科駅～近江塩津駅間（74.1km）が開業、北陸本線と結ばれることでようやく実現しました。

キハ11（キハ10型）

1957（昭和32）年、常総筑波鉄道（当時）がエンジン、運転台のない付随車として新製。1960（昭和35）年、エンジン搭載、運転台新設。1970（昭和45）年、運転台を残してエンジンを降ろし、制御車となる。新製当初は常総線に在籍していたが、1978（昭和53）年に筑波線へ転籍された。筑波鉄道の晩年は、ほとんど活躍の場がなく廃車同然でした。（高21回卒 松井泰寿



明治45(1912)3月卒業生(中11回卒)の記念写真。前より3列目・右側より5人目が、本校校歌を作詞した堀越晋先輩。右上の写真は堀越先輩を拡大したもの。『進修』16号より転載

→
進修同窓会創立25周年記念事業として、昭和38年に建設された旧本館玄関前の「校歌碑」



校歌「沃野一望」

100年余にわたって歌い続けられてきた校歌。制定は1911(明治44)年、作詞は堀越晋先輩(中11回卒・当時土浦中学校第4学年)、作曲・補筆が尾崎楠馬先生(高知県出身、国漢科主任、のち1922〔大正11〕年～1942〔昭和17〕年までの20年間は静岡県立見附中学校〔現静岡県立磐田南高等学校〕校長)。今号から校歌の一節一節にかかわることについて考えていきます。

焦点距離

同窓会を開くたびに、校歌のことが話題になります。そこで分かったことは、小学校・中学校・高校・大学、それぞれの校歌のなかで、私たちの誰もが一番良いと認めているのが、「土浦一高(土浦中学)校歌」。「沃野一望」が一番馴染んでいるということでした。著名な詩人や作曲家の手による校歌もありますが、やはり「♪沃野一望」だと言うのです。一中学生の作詞、一教師の作曲・補筆の校歌が何故これほどまでに印象深いのでしょうか。

神戸女学院大学名誉教授内田樹氏(専門はフランス現代思想、映画論、武道論など多岐にわたっています)は『街場の文芸論』(ミシマ社)の中で、「一流の作家は例外なしに説明がうまい。橋本治さんは説明がうまい。三島由紀夫もうまい。村上春樹もうまい。『説明のうまい作家』というのとつきにこの3人の名前が浮かぶくらいですから、説明という能力が作家的才能の本質的なところにかかわるということは、皆さんにもおわかりいただけると思います。

説明がうまい人って、友だちの中にもいるでしょう。ものごとの本質をおおづかみにとらえて、核心的なところをつかみだして、それを適切な言葉でびしりと言いつけることができる。

どうしてそういうことができるのか。技術的な言い方をすると、焦点距離の調整が自在だからなんです。はるか遠い視点から航空写真で見おろすようなしかたで対象を見たかと思うと、いきなり皮膚のでこぼこを拡大鏡でのぞくように近づ



関八州の重鎮として威風堂々とそそり立つ筑波山(上)。筑波山系から俯瞰し、写真右上に見える霞ヶ浦(右)

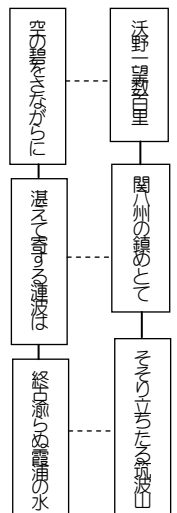
く」と述べています。

さらに、同氏は、一例として橋本治『パベルの塔』の一文をあげ、「この文章を読んだだけでは、『橋本さんは説明がうまい』ということの意味が皆さんにはまだぴんとこないかもしれないですけれど、物語るときの焦点距離の移動が恐ろしく速いということはおわかりになると思います。」と続けています。また、三島由紀夫の『豊饒の海』の第3部『暁の寺』、村上春樹の『1Q84』を例にあげて、「説明のうまい作家に共通するのは、遠くから、巨視的・一望俯瞰的に見たかと思うと、一気に微視的に、顕微鏡的な距離にまでカメラ・アイが接近する、この焦点距離の行き来の自在さです」とくり返し述べています。

一望俯瞰、眼前、心の内、未来へ

「沃野一望」の校歌、この焦点距離の調整という視点で味わってみると、内田氏が挙げた3人の作家に匹敵するくらい自在なものがあります。

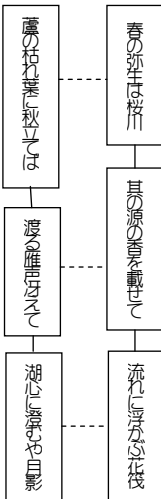
一番



まず巨視的・一望俯瞰的に、筑波山から霞ヶ浦へと視点が移り、その豊かさや雄大さが詠われるとともに、堀越先輩の母校への思いも感じとれます。

在校生や卒業生、誰もが母校の発展を期待しています。母校が、筑波山のように天下に冠たる学校に育ってほしいと思っています。しかし、心の底には「母校は変(渝)わらないでほしい」との思いがあることも事実です。それは母校の発展を否定するものではありません。時が遷り、校舎が新しくなり、教育内容が変わろうとも、懐かしい母校には自分が生徒だったときと同じ空気が漂っている。そこに学んだ者は、それを無意識のうちに切望しているのです。堀越先輩は、こうした思いを筑波山(「そそり立ちたり筑波山」と霞ヶ浦(「終古渝わらぬ霞浦の水」)に込めています。

二番



ここでは一気に眼前の風景に焦点が移り、春の桜川と秋の霞ヶ浦、花の香と鳥の声、風に散り川面を流れゆく桜花と湖面に映る月の影を対比させて、花鳥風月、郷土の美しい自然を描いていきます。陽春に浮き立つ若人の心と、晩秋にもの思う青年の心までもが伝わってくるようです。

三番

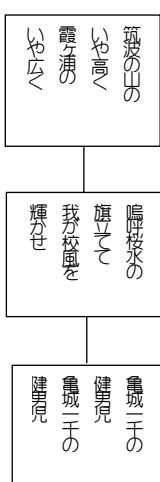
此の山水の美を享けて
我に寛雅の度量あり

此の素麗の氣を享けて
我に至誠の心あり

東国留の如を享けて
我に武勇の氣魄あり

さらに内視鏡的な距離にまでカメラ・アイが接近し、土中生の心の内に入っていきます。天地自然の恵み、先人のDNAを享け（享受）、自分たちに宿っている「寛雅の度量」、「至誠の心」、「武勇の氣魄」。「寛雅の度量」、「至誠の心」いづれも、他に対する心掛けですから、当然「武勇の氣魄」も、他のために、不正を正し、苦難に打ち勝つ氣魄であることは言うまでもありません。

四番



土中生の内面から、一気に未来へと焦点が移ります。それも自分たち（作詞当時の在校生たち）の未来だけではなく、永遠に続いていくであろう母校の後輩たちへのエールともなっています。そして、そのエールも筑波山と霞ヶ浦に託して送られています。

私たちは「寛雅の度量」、「至誠の心」、「武勇の氣魄」を天賦の資質としてこの身に授与されています。だからこそ、土中生や一高生の一人ひとりが、「筑波の山のいや高く」、理想や真理を探究し、それを「霞ヶ浦のいや広く」、世界の隅々

「除幕式」に際し、校歌碑とる尾崎先生令夫人芳様



遠路お越しください、除幕式に参列していただいた堀越晋先輩の長男晋一ご夫妻（左）。尾崎先生令夫人芳様（右端）
（昭和38年10月20日）

にまで及ぼしていく使命を背負っているのです。「上求菩提、下化衆生」、真理（悟り）を求めて精進努力し、その学びの成果を衆生（世界の人々、生きとし生けるものすべて）におよぼしていくさなさい、とのエールです。この真鍋台の校舎で学ぶ者は、自分だけのために学ぶのではなく、他のために学ぶのだとの決意がこもっています。私たちの母校の地である真鍋（Ⅱ学べ）は、土中生・一高生にとって、まことにふさわしい地名なのだと思います。

魂の琴線

「沃野一望」の校歌。単純直截で、決して高邁な哲学や処世訓を語るものではありませんが、若者の心情を素直に表現し、青年の心意気を歌い上げて、魂の琴線にふれるものがあります。

曲も簡潔。歌詞が七・五調のリズムで統一されているのを受けて、メロディーも一節ずつ同じリズムで統一。使用されている音域は、高すぎず、低すぎず、広すぎず、狭すぎず。拍子は四分の二拍子。

「イチ・ニ、イチ・ニ、…」と行進

をする時と同じノリになるため、日本人にはすぐなじめる拍子。また日本人がノリやすい符点のリズム（軍歌の特徴）に乗って曲が流れるため、歌いやすく、大きな声で堂々と歌うことができます（曲の解説は守谷高校音楽科郷恵子先生のご教示をいただきました）。

つまり、誰にでも歌いやすく、共感の思いを込めて歌える校歌であることが、私たちの胸を打ち、なつかしく心に残るのだと思います。

校歌作詞者 堀越 晋氏



東北帝国大学医学専門部卒業記念アルバム（1916）の堀越晋氏と、同氏の写真付き位牌（この2枚の写真は、現堀越晋氏、石岡市で生家を守る堀越邦彦様のご厚意により掲載することができました）

明治27（1894）年6月26日生まれ。石岡市井関80番地、堀越誠太郎氏の長男。明治40（1907）年4月9日旧制茨城県立土浦中学校第1学年に入学。明治45（1912）年3月27日同校第5学年卒業。

東北帝国大学医学専門部に進学、卒業後、宇都宮の病院に勤務。

大正6（1917）年8月14日病死。

中学4年生（16才）の7月、夏休みの課題として全生徒に出された作品募集に応じ当選。明治44（1911）年1月1日「校歌」制定。

長男は堀越晋一氏（東京在住）。

校歌作曲者 尾崎 楠馬 先生



静岡県立見付中学校の校長のとき

明治11（1878）年10月1日生まれ。本籍地高知県安芸郡赤野村桜浜74番地。

高知県師範学校卒業後、東京高等師範学校を明治40（1907）年3月に卒業。

明治40（1907）年4月5日、本校教諭に任ぜられて国語を担当され、当時、尾崎流の朗読が全校を風靡した。明治44（1911）年7月31日まで勤務。

その後、東京青山師範学校、浜松師範学校を経て静岡県立見付中学校初代校長となる。

土中時代からの盟友小田原勇教頭とともに、草創期の見付中学校の基礎固めに尽力。運動場づくりをはじめ、勤労・鍛錬の労作教育を通しての人間教育は高い評価を受け、現在も「ドカ中精神」として、磐田南高校に息づいている。昭和29（1954）年2月5日、東大病院にて病死。

（高21回卒 松井泰寿）

平成25年度第1回旧本館活用委員会開催

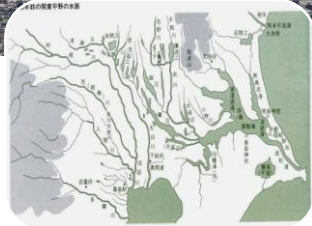
本年度第1回本委員会（上木幹夫委員長・高4回卒）が、去る4月23日（火）午前10時より、豊崎校長（高25回卒）はじめ関係者及び委員各位の出席を得て開催されました。

小泉副委員長（高19回卒）より、「昨年度の旧本館来館者が297名」「現本校職員の中で同窓会員は20名」などについて報告されるとともに、今年度は「旧本館を一般向け文化講座等に積極的に開放する」「『アカンサス』の発刊を年12回とする」などが提案されました。審議の結果、すべて原案通り承認されました。



← 東京スカイツリーから見た筑波山。眼下には沃野一望の関東平野がどこまでも広がっています。『BLUE STYLE COM』HPの「東京スカイツリー定点観測所」より転載

→ 海進により霞ヶ浦、牛久沼、印旛沼等が内海を形成している1000年前の関東平野『農業土木歴史研究会』HPより転載



校歌に謳われた「沃野」

1911（明治 44）年に制定され、当時の土浦中学校から現在の土浦一高に至るまで、100 年余にわたって歌い続けられてきた本校校歌。そこに登場する「沃野」とは、地味がよく肥えた平野、すなわち高い生産力（経済力）をもった広大な土地（平野）を意味しています。そこで、今号から少しの間、土地の生産力に着目し、このことについて歴史的視点から考察してみます。

地球温暖化

「地球温暖化」という言葉は、近年、大気中の二酸化炭素の増加による温室効果が問題視され、よく使われるようになりました。まずは、このことを地球の歴史の中で捉えることからいってみましょう。

137 億年前のビッグバンの後、宇宙が形成されることになり、地球は、45 ～ 46 億年前に誕生したと言われます。その後、生命が誕生し、6 千 500 万年からの新生代になると、霊長類が登場し、370 万年前には最古の人類のアウストラロピテクス（猿人）が生まれ、今日に至っています。

その間の地球は、温暖化・寒冷化が繰り返され、時には数万年間も寒冷期が続く氷河期もありました。氷河期には、北米大陸・ヨーロッパを中心に北半球の多くの地域が雪と氷に覆われました。我が国には、はっきりとした氷河期の名残は少ないものの、北アルプスにある U 字谷は氷河のあった証左なのです。そして最後の氷河期が 1 万 2 千年前に終わり、その後、地球の温暖化が急速に進行します。

（実は氷河期と氷河期の間は比較的温暖な時期が数万年以上も続く間氷期と呼ばれる時期があり、現在はそこにあるといわれています。もちろん氷河期でも間氷期でも、その中で寒冷・温暖が繰り返されています。）

氷河期が終わると、我が国では縄文期に入り、人々の活動がとも活発になる時代に突入します。気候の温暖化に伴い、植物の成長が飛躍的に促進されることによって、自然界の動植物を食料とした縄文人の行動が非常に旺盛になるのは当然のことでした。その一方で、海進（温暖

化により大地を覆っていた氷雪が溶けることで海面が上昇し、内陸部まで海水が進入する現象）が進みました。茨城県でいえば、県南から県西にかけて、現在の霞ヶ浦・利根川水系の多くで海進が認められ、筑波山麓周辺まで海水が広がったのは間違いありません。縄文期に形成された貝塚がその証拠で、この貝殻は、ほとんどが汽水域（海水と淡水が混在する状態の区域）のものであり、各地に残る貝層（自然に貝が堆積したもの）でも、牡蠣をはじめとして海水に生息するものが数多く確認されています。（今でもかすみがうら市の霞ヶ浦湖岸には、牡蠣の貝層がみられます）



復元された縄文人の堅穴住居（上、『上高史』より転載）津貝塚ふるさと歴史資料館の広場（右、『石岡市』HPより転載）茨城県最大の舟塚山古墳（右、『石岡市』HPより転載）

ムラからクニへ

縄文人は、温暖化によって豊富になった動植物や魚・貝を食料とし、台地の縁辺に 10 戸程度の集団であるムラを形成して生活しました。

1 万年も続いた縄文時代の末期には、大陸方面から稲作を伴う文化が伝わり、農耕生活が主となる社会が急速に形成さ

れていきます。いわゆる弥生時代の到来です。従来、弥生時代のスタートは紀元前 3 世紀で、北九州に始まり、100 年ほどを要して東北地方北部にまで到達したとされていますが、今日では、紀元前 5 ～ 6 世紀が始まりで、急速に東北北部まで展開されていたとされています。

農耕生活が始まることにより、人々の生活は大きく変化し、1 万年続いた縄文時代とは異なり、弥生時代は数 100 年で新たな社会へと変質していくことになりました。その最も大きな要因は、旧来に比べて生産高や蓄積が桁違いに増大したこと、農耕社会での指導者の必要性でした。つまり人々は、より多くの生産を求める中で、灌漑の敷設や耕作適地の拡大に努める必要から、社会集団を大規模化させる一方で、集団をまとめられる指導者を出現させていくのです。それは、集団をムラからクニへと変化させることにほかなりません。勿論、当時の日本民族は文字を持たなかったため、それが文字資料として残るものは全く存在しませんが、明治以降、特に戦後の発掘調査をもとにした研究から解明されたところです。

3 世紀になると、ムラからクニへの統合が進み、やがてヤマト政権による国土の統一（北九州から近畿方面）がなされます。いわゆる古墳時代の到来です。ヤマト政権は国土の支配体系を整え、より強固な支配体制を確立していきます。6 ～ 7 世紀がこれにあたる時期であり、政治的な中心地「飛鳥」から飛鳥時代とも言われ、やがて、奈良時代の律令制度による政治体制へと繋がることになりました。この間も、農具の改良などによって、生産向上の努力は続けられました。

生産力と人口

古来、一定の地域における人口は生産力に比例していると、よく言われることです。

奈良時代の人口が500万人と言われ、近世初期が1千200万人程度で、明治維新の頃でも3千万人程度。それが現在では、人口減少期に入ったとされながらも、1億2千800万人。現代の人口は当然ながら国内のみの生産力ではまかなうことはできませんので、対外貿易に頼ることが必定であることは承知の通りです。平成22年時点の食糧自給率はカロリーベースで僅か39%しかありません。このことからすれば、国内生産のみで養える人口は5千万人弱と言えるでしょう。

さて、江戸時代から明治期の人口統計はある程度信頼できるものの、奈良時代の「500万人」については、どの程度まで信用できるものなのでしょうか。この点について、常磐自動車道の工事に関連して常陸国衙関係の「鹿の子遺跡」の発掘調査が昭和59年から行われ、その際に貴重な資料が得られました。奈良時代後期から平安時代前期にかけた蝦夷征討などの軍事活動に関連した遺構・遺物の発見がそれで、その中に漆紙文書があり、大いに注目を浴びました。漆紙文書とは、国庁などで用いられた帳簿類の文書が漆容器の蓋紙などに再利用されたもので、漆が付着したため腐食せずに今日でも読むことができます。漆紙そのものから直接文字等を判読することはほとんど不可能ですが、赤外線カメラやエックス線カメラなどを用いて解説が可能なのです。

鹿の子遺跡の漆紙文書の中には、計帳や調帳などの租税に係るものがあり、奈良時代末期の常陸国の人口が約22万人と推定され、これをもとに当時の日本の人口を考えると、500万人と言われていた数

字が、現実よりかけ離れた数字ではないことが確認されました。



奈良時代の日本の人口を約500万と推定できた『鹿の子遺跡出土漆紙文書』（『石岡市』HPの「鹿の子遺跡出土漆紙文書一括」より転載）

生産力の向上

平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国と時代は変遷しても、人々の生産向上のための努力は嘗々と重ねられ、この間に特筆すべきことは鉄製農具の普及や肥料の使用です。中でも、刈敷といわれる草を刈り込んですき込む緑肥や草木灰を肥料とする方法がとり入れられると、単位面積当たりの生産が大幅に高まりました。さらには人糞尿も肥料として活用されると、近畿以西では二毛作や三毛作も行われるようになっていきます。

また、中世（平安末期～戦国時代）は、武士が社会の中心になり、戦乱もしばしば起こり、住みにくい社会ではなかったのかと思われがちですが、意外なことに、支配者の生産奨励もあり、活気ある人々の活動は目を見張るものがあつたのです。それは当然、生産力の向上にも直結していきます。ただ、中世は、古代からの荘園制度が依然として残っていて、土地の一元支配には程遠い状況でありました。そればかりでなく、後半になると、群雄割拠で支配者が多数存在したため、

日本全体の人口や生産力をつかみにくい時代でもあつたのは間違いありません。やがて戦国末期を迎えると、全国統一や一元支配に向けた動きが本格化していきます。織田信長は支配地域において「指出検地」を実施し、一元的な支配をめざしました。これを受け継いだ豊臣秀吉は、俗に言うところの「太閤検地」を実施し、全国を一元的に支配する体制を築くのです。しかし、豊臣政権は長続きせず、その基本的しくみは徳川家康による江戸幕府に引き継がれることになりました。

貫高制から石高制

ところで、中世末に群雄割拠した戦国大名は、支配地の経済的基盤を正確に把握するために検地を行うとともに、土地の生産性などの表示としては貫高制を採用しました。貫高とは、田地の面積を、そこから収穫することのできる平均の米の量を通貨に換算し、「貫」（1000文）を単位として表した数値をいい、それを税収の基準にする土地制度を貫高制と呼びました。従って、同じ貫数でも土地の条件などによって実際の土地面積は異なることになります。貫高制とは、米で納めるべき年貢を銭で代納する「分銭」に由来し、この制度のもとでは、武家の知行高も貫で表し、貫高に基づいて負担する軍役も定められました。貫高制の典型的なケースとして、後に小田原を中心に南関東一帯を支配した後北条氏の例があります。後北条氏は、田には1段当たり500文、畑は同じく150～200文を標準とし、永楽銭（中国・明から輸入した銅銭）あるいは代納として米で納めさせ、代納の場合は100文を米1斗2～4升に換算しました。なお、永楽銭で納付させた貫高制を特に

永高ともいい、戦国時代になると、自給自足体制の崩壊とともに支配階層の貨幣に対する需要が高まったことから、永高が普及したものとも言えます。その一方で、戦国大名の貫高制は、国人領主層や在地小領主層を知行制により家臣団として編成するとともに、年貢集取在地支配を行うシステムであると位置づけられています。在地掌握の程度については、十分掌握がなされたとする説と不掌握であつたとする二説に分かれています。

そして、貫高制から石高制に移行する時期がやってきました。当時の日本は貨幣を自給できなかったことや鏝銭（びたせん：私鑄銭などの質の低い貨幣。「ビタ一文」の表現。1文は最低の通貨単位）の問題もあり、貫高制の維持に見合う貨幣流通量が確保できなくなつたからです。戦国時代後期には、商業の発展や銀生産量の増加に伴い、銭に代わって銀や米が価値の基本になり、貫高制は混乱し、米などの代納が多くなりました。そうした状況を踏まえ、秀吉の太閤検地では、土地を測定して面積を出し、標準収穫量を算出する石高制を原則に採用しました。これを機に石高制に移っていきます。（次号に続く）（高21回卒 鈴木義人）



鎌倉期から戦国期にかけて現在の土浦地域を支配した小田氏の居城「小田城」址（右上）。貫高制を支えた「永楽通宝」（左上）とその鏝銭（左下）（貨幣は、しらかわただひこ『コインの散歩道』HPより転載）

平成25年7月2日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>←
関八州の重鎮「筑波山」から見た富士山。眼下には「沃野一望数百里」の眺望がひろがっています(『とぼとぼ山歩き』HPより転載)

校歌に謳われた沃野(その2)

「♪沃野一望数百里…」と、1911(明治44)年に制定されて以来、ずっと歌われてきた本校校歌。そして誰もが意識する“歌い出しのフレーズ”「沃野」。作詞した堀越晋先輩(中11回卒)が、この「沃野」にどんな“思い”を込めたのかを探るべく、今号も土地の生産力に着目しつつ、近世の「石高制」や「新田開発」について述べてみます。

石高制と一国御前帳

秀吉による太閤検地では、知行高が、支給される米の容積による「石」(石高、石Ⅱ石・斗・升・合の榲目の単位、1石Ⅱ約180^{リットル})で表され、これが石高制の確立に帰結していきます。そして、江戸時代に入り本格的な貨幣鑄造が行われるに至っても、石高制は維持されました。そのため、江戸時代は、田畑屋敷などの土地の価値に至るまで、面積に石高という一定の計数をかけて米の生産力に換算して表示されてきました。また米以外の農作物や海産物の生産量をも米に換算して表されました。もちろん、大名をはじめとする武士の所領からの収入や俸禄を表す場合も石高が用いられました。

豊臣政権で、もう一つ注目したいのは、全国統一が完成した翌年の1591年に、諸国に対して「一国御前帳」の提出を命じたことです。これは、翌年の人掃令と合わせて朝鮮出兵に備えた兵糧・軍役負担を確保するために、大名の領知高を確認する点を第一の目的としていましたが、結果として、日本全国の土地を同一の基準をもって把握するものとなりました。そして、この「大名の領知高を確認する」手法については種々雑多でした。長宗我部氏の土佐一国9万8000石は、実際の検地によるものではなく、同氏が動員可能兵力からの逆算といわれています。また佐竹氏や島津氏などに対しては、石田三成ら奉行が軍役負担などの政治的必要から石高を操作していたことも知られています。さらに、領内で米がほとんどとれず、もっぱら貿易による利益に依存していた対馬の宗氏や蝦夷地の松前氏は、実際には無高もしくはそれに近いにも関わらず、



「常陸国那珂郡上河内村検地帳」。上河内村は現水戸市内。石田治部少輔は石田三成(「茨城大学図書館」より転載)

利益から計算された形式上の表高があったえられていました。また一部の地域では、国人や農民による一揆を恐れて、検地そのものを行わなかったと言われていす。しかし、そうした地域でも、全国的な流れの中で、石高表記以降は、検地を受け入れざるを得ませんでした。

いづれにせよ、近世社会においては、石高制の確立と人掃令、武士の城下町集住政策により、兵農分離が進展するともに、城下町の整備も進みました。また石高制は武士・農民だけの関係ではなく、これに基づき、公家や寺社も公儀(幕府・大名)から所領を与えられ、町人は農民の石高に代わる各種の役負担を求められました。そうした負担体系の相違が、農民・職人・町人の最大の違いでした。

ところで、一石は、大人一人が1年に食べる米の量に相当することから、これを兵士に与える報酬とみなし、石高×年貢率と同じだけの兵士を養えることになりました。つまり、石高は戦国大名の財力だけでなく、兵力をも意味していました。また、江戸時代の軍役令では、大名は幕府により表高1万石あたり約200人程度の軍勢を動員する義務を課せられていました。ただ、石高は一般に玄米によるものが常で、実際には成人男性で1日玄米5合、年間玄米約1.8石が標準的に支給されていた。今日、我々はどれほどの

米を消費しているのでしょうか。米以外の穀物を消費する割合も増えて副食も豊かになったことから、成人一人あたりの消費は白米約0.4石と考えられています。



江戸時代に、土浦地域を支配した土屋氏の居城「土浦城跡」。この太鼓櫓門は土浦城のシンボルで、江戸時代前期の遺構としては関東地方で唯一の櫓門遺構です。明治30(1897)年に本校(当時の校名は「茨城県尋常中学校土浦分校」)が創設された新治郡役所は、この門を入った本丸御殿跡に建っていました。

江戸時代の石高制

江戸幕府が成立すると、改めて全国の石高の再確認が行われ、1607年には、大阪の役及び初期の各種普請による論功行賞がほぼ終了して、2代將軍徳川秀忠より諸大名に対し改めて所領が認知されました。そこに表された石高が「表高(おもてだか)」と称され、幕末までほとんど変わることがなかったのです。実際の大名の所領では、新田開発や検地の徹底によって実際の年貢賦課の基準となった実質の石高の「内高(うちだか)」との差は広がり、表高は資格を示すための数字に過ぎなくなっていました。その一方で、農村では内高から算出される年貢負担等が実際の負担と合致するように抜かりなく注意が払われ、それまで村全体の石高(村高)でしかなかったものが、個々の土地にも適用できるようになりました。



→
土浦中学校4年生(16才)のとき、本校校歌を作詞された堀越晋先輩(中11回卒)が眠る盛賢寺

石高制の定着によって、幕府は、大名の所領規模を簡単に把握できるため、加封・減封・転封や飛地（例えば、仙台伊達氏の飛地が現在の龍ヶ崎市に1万石ありました）の処理が簡単に行えるとともに、大名に課する負担や幕府役職の任免も石高に応じたものに差配できました。

また、大名も自己の藩において石高制を採り、家臣を所領である給所には住まわせず、年貢徴収や人夫動員も藩中央で取り仕切ることができました。農村でも、検地の徹底によって検地帳に石高が記載されるようになり、年貢は石高に年貢率を掛けるだけで算出され、雑税や夫役も同じような方法で課されました。

換言すれば、石高制は、封土を上から順次分割給付して主従関係を保ち、家臣間・農民間においては石高の多寡により上下関係を決定づけていました。そののみならず、複雑な面積計算をすることなく、石高に合わせて増加・減少・交換を可能にするという幕藩体制を維持・存続させるには、好都合な制度だったのです。ところが、18世紀になると、新田開発等に伴う米の生産量の増大による米価の不安定化が大きな問題として登場してきます。米価の下落は、米を売ることによって得た貨幣で生活する武士階級にとっては、収入減となり生活を逼迫させました。逆に、米価の高騰は、消費者である民衆の生活を逼迫させました。16世紀末の貨幣価値の不安定化による通貨制度の混乱を背景に、米が代用貨幣として通用していた時代に導入され、確立された石高制は、三貨（金・銀・銅）によって貨幣制度が安定化することで、支配階級である武士の窮乏化を招くという弱点を露呈させてしまったのです。このため江戸幕

府は、米価安定化のために様々な措置を講じていきました。しかし、最後まで幕藩体制の根幹に関わる石高制そのものの改革には、手を付けることはありませんでした。



新田開発

江戸時代に開発された土浦市の藤沢新田。肥沃な沖積平野が広がる桜川沿いにあり、生産力が高いそうです（上）。この新田開発に尽力した杉田庄右衛門らが同地に創建したという別雷神社。雨乞いの神である雷神を祀っています（右）

太閤検地時点でのわが国の耕地は約200万町歩（約200万ヘクタール）と推定されませんが、270年後の明治初期には、約400万町歩に倍増しました。またこの間の石高は約1800万石から約3200万石に、村の数も江戸初期の5万数千から幕末期の天保5（1834）年には6万3500余に、それぞれ増えました。これらは正確な全国統計の数字ではありませんが、江戸時代を通して、耕地・石高・村数ともに増加したことは確実です。その主な要因としては新田開発があげられます。そもそも新田開発に拍車がかかったのは戦国時代で、各大名が国力増強のため農地開拓に積極的に取り組んだからでした。そのため、戦国末期から江戸初期にかけて食糧の増産がなされ、人口も増加しました。しかし、人口増とともに主食である米が不足し、17世紀には、江戸幕府や諸大名の奨励のもと、役人や

農民主導で、湖・潟・浅瀬などの干拓が行われました。その後、丘陵地帯や台地、谷津（やつ）：台地と台地の間の谷間の湿地帯）など、内陸の荒地でも新田の開発が進められました。その結果、江戸時代を通して、全国の石高は1.8倍に拡大していきました。特にそれまで畿内に比べ開発が遅れていた東北・関東・中国・九州などで、農地が格段に増大したのです。新田開発を活発化させた背景には、測量技術の向上があります。大量の水を必要とする水田では、自然の降雨のみでは不可能で、灌漑用水の整備が不可欠でした。しかし、平坦地や緩やかな傾斜地では用水路の掘削は難しく、戦国時代以前は一定以上の傾斜地でないと水田の開拓は不可能だったのです。それが、幕府・大名主導の大規模な測量によって、平地に開拓された水田への水供給が可能になりました。逆に、水はけの悪い湖沼や泥湿地のような場所では、大規模な排水路を整備することで水田開発が手がけられました。さらには干潟等における干拓工事による水田化も推し進められました。幕府は、17世紀後半に無謀な新田開発を抑制しましたが、8代吉宗の享保の改革では「見立新田十分の一家」などを施行して、開発者の利益を保証することで、商人等の民間による新田開発を奨励しました。その後も、多くの将軍や老中が新田開発を政策の軸に据えていきました。新田の開発については、初期にあつては官営（代官見立新田）天領代官が主導・藩営新田）が中心でしたが、中期以降は民営（村請新田）農民が村全体で資金や労力を出し開発・町人請負新田）資金力のある都市商人が開発し、小作を雇って耕作）が主流となっていきました。

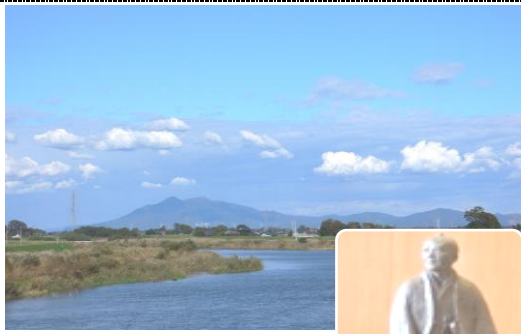
ところで、新田開発にも問題点がありました。巨額の利益を期待して取り組んでみても、開発が難航し資金難で破産する者がたり、そもそもが旱魃や水害の多発地で開発されなかった荒地や沼地、山林だったため、開発後に水害で破壊されたり、旱魃によって近隣の村との水争いが発生したりしたことなどです。最大の失敗例としては、下総国の印旛沼・手賀沼がよく引き合いにされます。近隣農民が何度も干拓に挑んだものの、利根川水系からの水の逆流によって失敗を繰り返しました。老中田沼意次や水野忠邦らによる、幕府直営の巨費を投じた開発も試みられましたが、水害による堤防・新田の崩壊・財政難・老中失脚等により、成功を見ることはありませんでした。いずれも第2次世界大戦後になるまで本格的な干拓・農地化は成功しなかったのです。（次号に続く）（高21回卒 鈴木義人）



幼い頃から堀越先輩が目にした忍瀬川と筑波山の風景（上）美田に囲まれたのどかな集落そこに佇む堀越氏の生家（左）

旧本館が8月にNHKテレビに登場

7月1日（月）に、本校旧本館でNHK—BSザ・プレミアム「零戦」搭乗員たちが見つめた太平洋戦争」のロケ撮影が行われました。放送は約1ヶ月後の8月3日（土）と8月10日（土）のいずれも21時～22時30分です。



→
関八州の治水工事や新田開発等に多大なる業績をあげた伊奈忠治の銅像（川口駅前キュボ・ラ本館内）（『関東郡代伊奈サミットの会』HPより転載）



←
流域の新田開発により「沃野」が形成され、
その中を流れる小貝川と、そこにそそり立つ
筑波山（『写真と音楽あれこれ』HPより転載）

平成25年9月10日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>

校歌に謳われた沃野（その3）

鮮烈なインパクトある響きで、耳に残って離れない豊かな大地・「沃野」。
作詞した堀越晋先輩（中11回卒）は、そこに、先人達に対する深い畏敬の念を込めていたと言えます。豊かな大地は、幾世代にもわたる人々の知恵と力、汗と涙の賜であることを、日々実感していたからでしょう。「沃野」を考えるなかで、今号は、県南地区の新田開発を取り上げてみます。

新田開発と伊奈氏

江戸初期の新田開発にあつて、大きく貢献したのは伊奈一族でした。幕府初期の「関東代官伊奈氏」は関八州の幕府直轄領約30万石を管轄し、行政・裁判・年貢徴収等を取り仕切り、警察権も統括していました。また將軍の鷹狩りをするための鷹場の管理も担当するなど、幕府組織の重要な部分を占めていたのです。

伊奈氏の陣屋は、はじめ、伊奈屋敷跡が現在も残る武蔵国小室（現埼玉県北足立郡伊奈町）に置かれ、後に同国赤山（現埼玉県川口市）に移されました。さらに同国小菅（現東京都葛飾区小菅）にも陣屋が設けられ、ここには家臣を代官として配置していました。

家康の入府（秀吉の全国統一の後、従来の支配地である三河・遠江・駿河・信濃・甲斐の領地150万石を召し上げられた徳川家康が、あらためて北条氏の領地であつた武蔵・伊豆・相模・上野・上総・下総・下野の一部・常陸の一部250万石を与えられ、北条氏の拠点小田原ではなく、江戸に入つたこと。なお家康は、入府を、農業社会での祭日にあわせて、八朔にあたる8月1日にしました）後、武蔵国小室等に1万石を与えられた伊奈忠次は、関東代官頭として大久保氏・彦坂氏・長谷川氏とともに家康の関東支配に貢献しました。各地で検地・新田開発・河川改修に敏腕を振るい、利根川や荒川の付け替え普請・知行割・寺社政策等など、江戸幕府の財政基盤の確立に大きく寄与したのです。関東各地に残る「備前渠」「備前堤」とよばれる運河や堤防は、いずれも忠次の官位「備前守」に由来しています。



徳川頼房の依頼で伊奈忠次が造った水戸市の備前堀。忠次の像があります（『水戸商工会議所』HPより転載）

そればかりでなく、忠次は、諸国からの水運を計り、江戸の繁栄をもたらすとともに、農民には炭焼き・養蚕・製塩などをすすめて、桑・麻・楮などの栽培方法を伝え広めたため、神仏のように厚く敬われたといわれています。それゆえ、埼玉県の伊奈町は忠次にちなんで「伊奈」の名を町名とし、また次男忠治は、茨城県筑波郡伊奈町（現つくばみらい市伊奈地区）の町名に取り上げられ、県を超えて親子二代で地名の由来となっています。

旧筑波郡伊奈町と伊奈忠治

伊奈忠治については、父忠次・兄忠政の仕事を引き継ぎ、関八州の治水工事・新田開発・河川改修を行い、荒川開削・江戸川開削に携わりました。江戸初期の利根川東遷事業（江戸の町は利根川の洪水に悩まされたが、この事業により、利根川は現在の流路に近くなり、江戸を洪水の危険から救うとともに、新田開発や利根川から関宿を経て江戸に繋がる水運にも大きな影響を及ぼしました）の多くが忠治の業績であり、鬼怒川と小貝川の分流工事や下総国・常陸国一帯の堤防工事を担当しました。中でも、小貝川には、上流から福岡堰・岡堰・豊田堰の3つの堰を構築し、その結果、単に地域を洪水の危機から救

ったのみならず、用水路・排水路を開削して、伊奈・谷和原3万石（現つくばみらい市）、相馬2万石（現取手市藤代地区）と呼ばれる美田地帯をつくり出す大事業も成し遂げました。



小貝川にある現在の「豊田堰」（上）と福岡堰（左）



「伊奈神社」（上）
毛有薬師堂内の「伊奈忠治顕彰碑」（左）

そして、忠治の業績を称える人々によって、福岡堰北東の小貝川堤防横（つくば市真瀬地区）には、昭和16（1941）年、伊奈神社が祀られ、今日でもその業績が偲ばれています。また取手市内毛有の毛有薬師堂境内には、昭和33（1958）年、伊奈忠治顕彰碑が建立されています。

新田開発村の低湿地での工夫

前号に触れたように、新田開発は、領主や農民にとって収入増に繋がる利得がありました。その一方で、多くのリスクも伴いました。最大のものは、「水への脅威」でした。水に対する備えは、あらゆる知恵と工夫を結集して対策が講じられたのです。主なものをあげてみても、次のようなものがあります。

① 屋敷内の土盛り

「水対策」として主屋部分に盛り土をするのは、農村各地でよく目にする光景ですが、新田開発村の中では、屋敷全体に盛り土を施す家が数多く確認されています。屋敷全体が水田面より1m以上も盛り土されている例もあります。その土の量たるや膨大なものがあり、それを、何キロも離れた台地から運んできているのです。自然災害に備え、安定した生活を送るための努力・忍耐には驚くばかりです。

② 水塚・水屋

屋敷内の一角に特に高く土を積み、その上に倉庫兼住居設備を持つ建物がよく設けられています。これが水塚・水屋といわれるもので、まさに水害時には緊急の避難所になります。したがって、水塚は普段は倉庫として使用されていますが、中には常に緊急時に生活するための必要最低限の食糧が収納され、人が寝起きする準備もなされています。

また、盛り土そのものにも興味深い特徴があります。現在の取手市藤代地区を例にとれば、それは、標高とかなり深い関係があると言えます。あるも

のは周囲の水田より3mもの高さがあるかと思えば、あるものは屋敷地よりわずかに40cm、水田面からでも1mにすぎないものもあります。昭和25（1950）年の小貝川堤防決壊による水害の際には、双方とも水塚の土台部分が水に浸かった程度で、大事に至らずに済んだそうですが、標高の低い前者の家では、主屋は床上2mまで水没してしまう洪水に見舞われ、改めてそれよりも高い地に建つ「水塚」設置の知恵を実感したと言えます。これをみても、先人達は屋敷の標高を日頃の生活の中で意識し、土盛りの高さも決めていたことがわかります。さらに言えば、盛り土は近隣の台地から運んできたのですが、土を締める効果を考え、貝塚の貝を含む土を利用して水塚も見られるのです。これもまた生活の知恵と言えるのでしょうか！

③ 構堀（かまえぼり）

水への備えには構堀もあります。これは、屋敷全体を堀で囲んだもので、中には、幅4〜5mの大規模のものもあります。当然、排水の便を第一義的に考えたものでしょうが、掘り上げた土は、屋敷地や水塚の盛り土に利用したばかりでなく、それをもつて堀内側に土塁を築いたりして、備えを一層強化したところも見られます。



軒下まで浸水した昭和25年の藤代地区の水害（右上、『写真記録茨城の20世紀』より転載）
敷地の周りに列植された屋敷林と生垣（下右）
排水路として屋敷を囲んでいる構堀（下左）

④ 舟

低湿地の水田地帯では、農作業に使用する舟とは別に、緊急時に米俵等を載せて避難するために、かなり大きめの舟が用意されている場合が結構あります。舟は、ふだんは納屋等の天井や軒に吊されていますが、以前の出水の際には、荷物を積んで広い場所に待機させ、増水とともに、これに乗って避難したとのことでした。

⑤ 生垣・屋敷森

生垣はこの農村を訪ねても一般に見かける風景です。防風の備えであることが多く、その典型的な例は散村の代表として知られる富山県の砺波平野が有名です。（わが土浦一高を含め、明治期の旧制中学校等の建造物で、国指定重文は全国で5校ありますが、そのうちの一つである旧富山県立農学校（現南砺福野高校）はそのど真ん中に建っています）ただ、低湿地における生垣は、篠竹や真竹で構成されていることがよくあります。これは、単に防風がねらいではなく増水の際のゴミを遮る目的を持っているところに特徴があるとも言えます。

屋敷森も台地状の農村にはよく見られるのですが、低湿地においては、生活上欠かすことの出来ない「たき木」や建築材を確保したいとのねらいが顕著であり、そのための植林が進められた結果なのです。これも、人々が生活の改良に意を用いた証であり、その工夫には感心するばかりです。

（次号に続く）（高21回卒 鈴木義人）

県外文化財視察が実施されました

平成25年度県外文化財視察は7月27日（土）に大曾根副会長（高4回卒）・豊崎校長（高25回卒）をはじめ、県教育庁職員ら多数の関係者の参加を得て行われました。今回は「我が国近代建築の父」ジョサイア・コンドル及びその薫陶を受けた辰野金吾の作品群を訪ねながら、辰野の愛弟子、本校旧本館の設計者駒杵謹治をしのぶとのテーマで、かすみがうら・石岡両市の文化財保護審議会委員の神戸信俊氏（高19回卒）を講師に迎え、日本銀行、東京駅丸の内駅舎、旧岩崎邸、東京大学工学部建築学科（ここは東京大学工学部教授池田誠氏（高39回卒）のご案内）など6つの建造物を視察しました。

←
日本の人口の推移 (『平成 16 年版
少子化社会白書(全体版)』より転載)

校歌に謳われた沃野 (その 4)

先人たちがつくり上げてくれた沃野が、私たちの生活を支えてきました。しかし現在、多くの食糧が輸入に頼っている状況(中でも、小麦・大豆・トウモロコシなどはほぼ全量が輸入)は看過できないものがあります。現在進められているTPP(環太平洋戦略的経済連携協定)交渉からも目を離すことができません。私たちの生活の基盤である「食糧」問題は、避けて通れない事柄であり、農業全体について、日本人全体が考え直す時期に至ったのではないのでしょうか。

日本の人口の推移

奈良時代の人口が約 500 万人であったことについては、すでに述べたとおりですが、その数値はあくまで推計であり、近代以前の人口統計は同様にすべて推計によつて算出されたものです。

我が国では 7 世紀に、最初の全国戸籍「庚午年籍」が作成され、平安時代まで続きます。しかし、いずれも現存せず、具体的な数字をうかがい知ることは出来ません。『日本書紀』等の記述から、戸籍が作成されたということを知ることが出来るばかりです。その後、奈良・平安の時代の 500 年間は、概ね 500 万人から 600 万人くらいで推移したというのが、多くの研究者の一致した見方です。鎌倉から戦国期のいわゆる中世の 400 年間にあつては、農業技術(肥料・鉄製の農具)の関係で、食料生産が増大し、人口も 600 万人から 1200 万人に倍増したと言われます。それが、江戸時代の新田開発等によつて、270 年後の明治 5 年(1872)には、3480 万人に増大しています。

明治 4 年(1871)に戸籍法が公布され、以後の人口統計は正確なものとなりますが、明治 45 年(1912)には 5000 万人を超え、昭和 11 年(1936)には明治初期の人口の倍となる 6925 万人にまで増加しました。

その後、第二次世界大戦後の昭和 20 年代前半にベビーブームを迎え、外地からの引き揚げも加わって、昭和 23 年には 8000 万人を超え、昭和 31 年(1956)には 9000 万人、明治百年といわれた昭和 42 年(1967)には、ついに一億人を突破しました。

このように明治以降の近代日本は、100 年間で総人口が三倍になるという人口拡大期で、さらに昭和 46 年から 4 年ほどは、第二次ベビーブーム期と言われ、人口が急増しました。その後も人口は増え続け、平成 22 年(2010)には一億 2806 万人になりました。しかし、その後は減少傾向が見られ、総務省の統計では、50 年後の 2060 年には 8600 万人にまで減少すると推計されています。

明治以降の耕地・農業

明治以降の人口の増加に対して、耕地面積はどのように推移したのでしょうか？

江戸時代には、幕府や諸大名によつて、耕地の拡大・生産の増大に最大の努力が続けられた結果、我が国の耕地面積は約 200 万ヘクタールから約 400 万ヘクタールへと倍増したことは既述の通りです。

その後も、明治 43 年(1910)の耕地面積が約 510 万ヘクタール、さらに昭和 30 年(1955)が約 600 万ヘクタールと増え続けました。ただ、以後、減少へと転じ平成 18 年(2006)が約 470 万ヘクタール、平成 22 年(2010)には 423 万ヘクタールとなり、これは概ね江戸末期の耕地面積に当たる数値です。

明治以降の耕地面積の推移は、我が国の社会環境の変化に伴うものであり、その増加は、旧武士階級の救済にもなるとして、国を挙げての開墾・開拓が行われた結果です。特に、北海道開拓使を設け、積極的に北海道の開拓を進めた結果でもあります(北海道開拓では、広い植民区画と散居村落の中で、家畜を使った欧

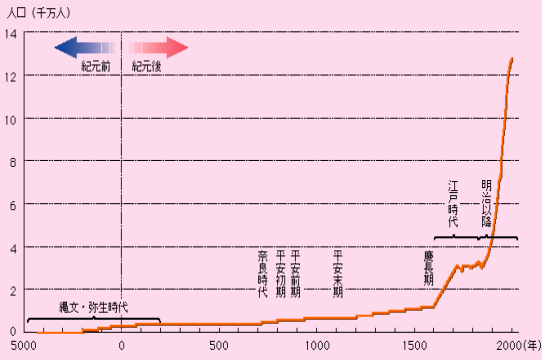
米式の畑作農業が進められました。

しかし、当時の開拓農民の米に対する執着は強く、品種改良や土地の改良と水利施設の建設が進み、さらに稲の栽培技術が改良された結果、稲作が拡張していくことになりました。平成 24 年度の全国耕地面積約 400 万ヘクタール中、北海道は約四分の一の 100 万ヘクタール。水田に限って言えば、全国 g 作付け面積 150 万ヘクタール中、7%の 11 万ヘクタールで、収穫高日本一を新潟県と競い合っています。

その後も、増大する人口を養うための食糧増産が必要となり、耕地面積は増大していききました。ただ、昭和 30 年代後半からは、工業の発展のため多くの工場用地が必要になり耕地面積は減少していくことになりました。

このような耕地面積の推移のみから考えると、今日の我が国では、明治初期と同じくらいの 300 数百万人分しか食料を自給できない計算になります。現在の食糧自給率が、カロリーベースで 39%ということですから、現状では 5000 万人強分の食糧生産ということなのです。ただ、耕地面積の大小のみで、食糧自給率を論じることが出来ないのは、自明の理です！

明治維新後、政府は、欧米に迫いつくために欧米文化を導入し、殖産興業と富国強兵策を展開しました。そのためにも、政府は財政基盤の強化に迫られ、廃藩置県・田畑永代売買禁止の解除など、土地に対する封建的な制度を廃止した上で、徴兵令・学制とならぶ三大改革とも言えるべき地租改正を実施したのです。これは、全国の土地を測量し、地主や自



資料：総合開発研究機構「人口減少と総合国力に関する研究」、国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集 2004」

作農に地券を交付し、土地の所有権を認めるとともに、土地の所有者に地価の3%を地租として納入させるものでした。これにより、土地所有者の生産意欲は向上し、民間資本による耕地開発が積極的に開始されたのです。

このような耕地開発や用排水の改良整備を可能にした要因は、従来の伝統的農業土木技術に加え、セメント・ポンプ・ダイナマイトに代表される欧米の最新土木技術の積極的な導入でした。

また、「水利組合条令(明22)」・「耕地整理法(明32)」・「水利組合法(明41)」などの法整備による土地や農業水利の制度的な基礎が確立されたことも大きかったのです。食糧生産の増強をはかるためには、耕地を水害から守り、新たな土地を開発するためにも、治水は必要不可欠の問題です。

明治期以降は、江戸期に発達した河川舟運の衰退とともに、河川工事も舟運のための「低水工事」から河川に堤防を築いて洪水を防ぐための「高水工事」へと転じました。法的にも、明治29年の全国的な大洪水を契機として、「河川法」・「砂防法」・「森林法」が制定され、治水の制度が整備されたのです。その結果、淀川・利根川・信濃川・筑後川など主要14河川は内務省が直轄して、他は各府県が改修工事を行うことになり、全国的に河川の管理が行き届くことになったのです。なお、河川法施行に際して、すでに存在している農業用水などは法によって許可されたものとみなされ(既存の農業用水の権利が法的に認められた)、農業にも多大な影響を及ぼすことになったのです。

このように、耕地の開発や改良整備の技術的・制度的基礎が体系化され、基盤整備が近代国家の中心的施策として展開されるようになり、人口増を補う食糧の増産体制も整えられていったのです。

今後の日本の農業

明治以降、増え続ける人口と生活向上による食糧需要増をまかなうために、米をはじめとする農産物の増産が、食糧供給を安定化するという目的で実施されてきました。具体的には、灌漑排水技術の導入により水田を「乾田化」し、表作に稲、裏作に麦等を栽培するなどの土地利用率の向上がすすめられ、食糧生産の量的増大ははかられてきたのです。その間、家畜の下肥・金肥(大豆かすや魚粉など)、やがては化学肥料を大量に投入し、生産性の向上が図られました。

ただ、肥料の大量投入による、作物の長大化と倒伏、雑草や病害虫の問題が発生するのですが、農薬の使用と品種の改良、さらには農具・農法の改革によって土地を深く耕すことなどにより、こうした問題を克服していったのです。

1960年代になると、農業の機械化がすすみ、機械化は無理と考えられていた稲作でも、70年代にはいると急速な機械化がはかられ、今日では、稲作が最も人手のいらぬものとなってきました。

しかし、同時に60年代以降の高度経済成長期以降は、既述のとおり、農地の工場用地や住宅地への転用がすすみ、さらには農業就業者の減少・高齢化など多くの問題があり、今後の安定的な食糧生産を危惧する考え方もあげられています。

農業大県いばらき

茨城県は先人たちの努力により広大な農地が開かれ、温和な気候、大消費地東京に近いなど、生産・販売条件にも恵まれ、全国屈指の農業県として発展し、県内外の消費者への食料供給に重要な役割を果たしています。なかでも園芸農業は、県の農業産出額全体の約5割を占めており、全国シェアの上位を占める園芸品目が数多くあります(全国1位…メロン、ピーマン、レンコン、ミズナ、チンゲンサイ、クリ、ミツバ、ホシイモ。全国2位…ハクサイ、レタス、ナシ、ゴボウ、ラッキョウ、パセリ。全国3位…サツマイモ、ネギ、ニラ、トウモロコシ、カボチャ、シソ、シュンギク)。東京都中央卸売市場には150品目もの青果物が出荷されており、その青果物取扱金額は全国1位の552億円、平成16年からトップの座を維持しています。まさに東京の台所を茨城が支えています。

茨城県は、北で採れる農産物の南限、南で採れる農産物の北限ともいわれています。例えば、暖かい地方でなければ育たないミカンと、寒い地方でしか育たないリンゴ。この2つの農産物を商品として生産される県は、茨城県ぐらいです。(ただし、山口県でも、中国山地の山間部でリンゴが生産され、そして夏みかんの生産も有名です。山口県下の道路のガードレールは夏みかん色です)

農業(食料自給)は国の基本です。豊かな農産物を産出する茨城県の農業は、「安全・安心」で「高品質」な農産物を安定的に供給するだけでなく、世界が認めるブランド品となるような、すぐれた

加工品をも創り出していく可能性を秘めています。

※ 茨城の統計

耕地面積(H22)	17.5万ヘクタール(全国2位)
農家戸数(H22)	10.3万戸(全国2位)
農業産出額(H21)	4170億円(全国2位)
うち園芸部門	2044億円(全国3位)



筑波山麓の美田(上は土浦市内で、左はつくば市内で筑波山を仰ぎ見た風景です)



次号は「筑波山・一望」について述べることにします。



→
桜川市真壁から見た筑波山（撮影：平成 25 年 11 月）



←
霞ヶ浦から仰ぎ見る筑波山。湖岸に広がる街並みは土浦市。市街地左端の高い建物が「ウラボル」です。（撮影：平成 25 年 11 月、阿見町から）

校歌に謳われた「筑波山」（その 1）

「♪…関八州の重鎮とて そそりたちたり筑波山…」と本校生が歌う筑波山。ある調査によれば、県内の県立高校の 80 校以上の校歌にも謳われているといえます。また、小紙 53 号では、明治 43（1910）年 10 月の高田保氏（中 12 回卒）による「筑波登山」を紹介しましたが、旧制中学校時代以来、「遠足」「歩く会」等を通して、どれほど多くの本校生・先輩方が登ってきたのでしょうか。今回は余りにも慣れ親しむ「筑波山」の歴史や自然などについて取り上げてみたいと思います。

筑波山

私たち茨城の県南・県西地方の人間にとって、筑波山は、まさにシンボルです。筑波山は決して独立峰ではなく、八溝系の南端に位置しています。しかし、その姿は、見る角度によって独立峰にも見え、また、様々な形を呈することから、まさに「我が筑波山が一番！」との声がしばしば聞かれるところ です。

筑波山は、西側の男体山（標高 871 m）と東側の女体山（標高 877 m）からなり、雅称を紫峰といいます。

筑波山全域が水郷筑波国定公園に指定された保護エリアで、中腹から山頂付近は特別保護区（自然公園法）に指定され、樹木の損傷・植栽、動植物の捕獲・採取、たき火などの行為が禁止されています。『万葉集』にもしばしば登場し、日本百名山、日本百景の一つとされており、開聞岳（鹿児島県・標高 942 m）とともに 1000 m 未満の山で、百名山では、最も標高が低い山です。

男体山・女体山の山頂には筑波山神社の本殿があり、山腹には拝殿があります。また、関東平野を一望するロケーションの良さから、アマチュア無線用中継局筑波山レピータをはじめとして、気象観測や無線通信の上でも重要な拠点とされ、山頂付近には数多くのアンテナが存在しています。

なお、余談ながら、太平洋戦争劈頭の真珠湾攻撃の実施を命じる隠語は「ニイタカヤマノボレ」として有名ですが、あまり知られてはいないものの、攻撃中止の際は「ツクバヤマハレ」であったといえます。

筑波山では、古来より農閑期の行事として歌垣が行われ、近隣から多くの男女が集まっては歌を交わし、舞い、踊り等を楽しむ習慣があったといわれます。これは、今年の豊穣を喜び祝い、翌年の豊穣をも祈願する意味があったのです。『万葉集』第 9 巻 1796 番収録の高橋虫麻呂の歌に、

鶯の住む 筑波の山の 裳羽服津（もはきつ）の その津の上に 率（あども）ひて 未通女（をとめ）壮士（をとこ）の 行き集ひ かがふかがひに 人妻に 吾（あ）も 交はらむ わが妻に 人も言問へ この山を 領（うしは）く神の 昔より 禁（いさ）めぬわざぞ 今日のみは めぐしもな 見そ 言（こと）も咎む

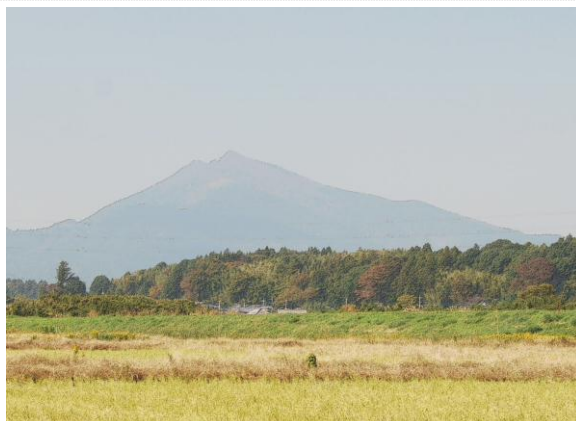
と、歌垣への期待で興奮する気持ちが素直に、のびのびと、詠われています。

山名の由来については異説が多く、最も古いものでは、『常陸風土記』にある筑算命（つくはのみこと）という人物に由来するとの説ですが、史実とは考えにくく、学術的には次のようなことが考えられます。

- 縄文海進により、縄文時代の筑波山周辺には、波が打ち寄せていたと考えられ、「波が寄せる場」、すなわち「着く波」（つくば）となった。
- 縄文時代の筑波山周辺は海であり、筑波山は、波を防ぐ堤防の役割を果たしたため、「築坡（つきば）と呼ばれ、のちに筑波となった。
- 「つく」は「尽く」で「崖を意味し」、「ば」は「端」を意味する。
- 新たに開発して築いた土地として、「つくば」は、「築地」ないし「佃地」を意味する。

- 「つく」は、「斎く」（いづく、神を崇め祀る）、あるいは「突く」（つく、突き出す）であり、「ば」は「山」を意味する。
- 「平野の中に独立してある峰」の意である「独坡」にちなむ。

- アイヌ語の tuk-pa（とがった頭）または tuk-pa（刻み目）にちなむ。



かすみがうら市志筑から見える筑波山。土浦方面の筑波山に比べ、双峰の間隔が狭くなっています。手前は恋瀬川の堤防。

筑波山の成り立ちから歴史時代へ

ところで、この筑波山の成り立ちを見てみますと、はるか 1 億年以上も前のことになります。

今から 1 億数千万年前の日本は、海底の隆起・沈降が繰り返えされた時期を迎えますが、筑波山もその例に漏れず、1 億 5 千万年ほど前、地上にその姿を現したと考えられます。いわば筑波山第一世の誕生です。山頂付近は黒色のハンレイ岩、山腹以下は白色のカコウ岩からなります。いずれも火成岩ですから、元来、地中のマグマが、固まって形成された岩石です。ただ、そのまま今日の筑波山に

なつたわけではなく、その後、海底に沈下し、今から1億年ほど前、再び地上に姿を現すことになったといわれます。これが、筑波山二世の誕生です。

その後も日本列島では、大きな地殻変動を繰り返しながら、今日へと至ることになります。筑波山では、断層により二つの峰が形成されることになりました。20万年ほど前のことと考えられています。

やがて、人類が登場し、筑波山周辺でも人間の営みが展開していくわけです。

特に、最後の氷河期が終わる縄文期を迎える1万年程前になると、温暖化による海進により、筑波山の麓まで海水が入り込んでくるようになります。しかし、このことは当時の人間にとって、食糧としての魚貝を入手しやすくなったという点で、温暖化とともに住みやすくなったと言えます。同時に、大変活動的な環境をもたらしこととなります。筑波山から霞ヶ浦に至る洪積台地の縁辺に、多くの貝塚・住居跡が今日知られるところ。歴史時代に入ってから筑波山は、いつも、この地域の中心にありました。

律令時代には、常陸国府中(現石岡市)から、筑波山塊の南を経て筑波山南麓に至りますが、そこには郡衙と称する役所が置かれました。

その一部が、平

沢官衙遺跡で、

昭和50年にその

重要性が知られ、5年後に国史跡として指定されました。平成5年からの確認調



つくば市内の国指定史跡「平沢官衙遺跡」。後方には筑波山が聳えます。

査を経て、施設等も復元され、平成15年から、遺跡公園として、一般に公開されるようになったのです。



石岡市園部川から仰ぐ筑波山。男体山が女体山の後ろに隠れてしまっています。(上) 筑西市赤浜から眺める筑波山 (左)

平安中期以降の武士が活躍する社会になると、筑波山は、荘園を巡る争いのまっただ中に置かれることになりました。10世紀に生じた「平将門の乱」の関係者の拠点は、いずれも筑波山の南麓から西麓に広がる沃野にあり、豊かな土地を巡っての一族の争いだったのです。乱後の筑波山麓は、将門の乱を制した、将門の従兄弟平貞盛の血筋が支配し、筑波山の南にある多気山を拠点とし、多気氏を名乗るようになります。多気山は標高120m余の山ですが、後に筑波山を仰ぎ、南から西には、一面、沃野を見晴らす戦略上の一大拠点です。現在も山頂付近には空堀や土塁、建物の礎石などが残されています。その後多気氏は、常陸大掾なる役職に就き、役職名から大掾氏を名乗るようになります。筑波山麓の一大勢力を維持していくことになるのです。

鎌倉時代になると、多気山の大掾氏の目と鼻の先にあたる小田の地を、恩賞と

して八田氏(後の小田氏)が獲得し、小田城を築きました。そして、大掾氏と八田氏は争うようになり、敗れた大掾氏の支配地は一族の馬場氏が継承しますが、拠点は現在の石岡に移り、多気城は寂れていくことになりました。代わって八田氏一族が、筑波山麓の一大勢力となっていきます。

なお、この時代、筑波山はしばしば和歌の題材となり、多くの歌集に載せられています。(『新古今和歌集』・『風雅集』・『続拾遺和歌集』など)

その後、鎌倉幕府滅亡後の南北朝の時代になると、小田氏は、下妻城主下妻氏・関城主関氏・笠間城主笠間氏らとともに、後醍醐天皇の南朝方につき、足利尊氏に従った常陸太田の佐竹氏と激しい戦いを繰り返しました。そして、南朝方の北畠親房が、南朝の正当性を強調した『神皇正統記』を著すのは、小田城から関城に滞在した時でした。

やがて、足利氏による足利幕府が成立しますが、筑波周辺の政情は安定せず、小田一族、結城一族、下妻の多賀谷一族、常陸太田の佐竹一族、宇都宮一族などが互いに争う状況が続いたのです。戦国期になると、越後の上杉謙信もこの地に出兵するなど、戦いは、限りなく続けられました。天正18(1590)年、当主小田氏治が敗死することによって、鎌倉時代から400年続いた名門も滅びることになり、まもなく、徳川家康によって戦乱の時代に幕が引かれ、筑波山一帯にも平和が訪れることになるのです。

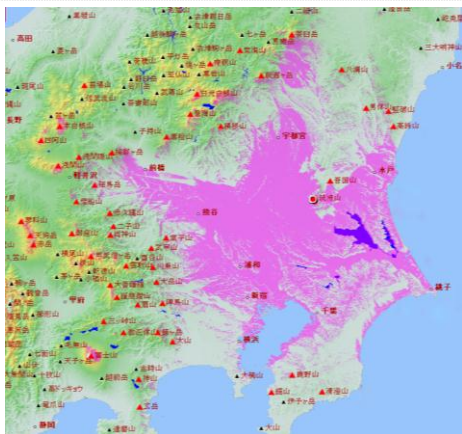
筑波山からの眺望

現在、筑波山頂からの眺望としては、

北は八溝山塊から、西に向かって日光男体山・赤城山・妙義山、秩父の山々から富士・箱根方面が広がっています。南は東京の高層ビル群から房総半島の山塊、東は霞ヶ浦から鹿行の台地というふう

に、まさに関東一帯を眺めることが可能です。ただし、これらは冬の気象条件の整った時のことであり、多くの場合は、春霞の中に浮かび上がるように、かすかに見える場合がほとんどではないでしょうか！

次の図は、筑波山から見える範囲をあらわしたもので、地図上でピンクの地域が筑波山から見える範囲で、▲で示した山が見え、▲は他の山の陰になつて見えない山です。(この図は、高21回卒・鈴木道信の作成によるものです)



「筑波山可視マップ」。中央の色の違う地域と、関東甲信地区の▲印山が可視範囲です。

旧館玄関天井壁が落下

10月31日・11月11日の地震により、下の写真のように天井壁が落下しました。ひび割れも広範囲になり、貴重な「漆喰装飾」さえ損壊しかねない状況です。早急な対策を関係方面に働きかけています。



平成25年12月10日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>

→
知足院中禅寺
の名跡を継いだ
現在の筑波
山大御堂。



校歌に謳われた「筑波山」(その2)

関東平野の真ん中に屹立し、「関八州の重鎮」と謳われる筑波山。江戸時代には、その中腹にあり、輪奐の美を誇った知足院中禅寺に、徳川光圀(水戸黄門)・高野長英・吉田松陰などの多くの歴史上の人物も参詣しました。また、幕末の天狗党事件の舞台ともなりました。現在の筑波山は、水郷筑波国定公園の指定を受けたり、温泉(双神の湯)開発にも成功したりして、観光客・ハイキング客で賑わっています。この筑波山の歴史等について、今号も、前号に続き、述べてみたいと思います。

江戸時代の筑波山

万葉の世から歌に詠われてきた筑波山。古くから関東地方の人間にとつては特別な存在であり続け、それが江戸時代になると、徳川氏の信仰と、平和な時代の到来による人々の信仰心が、相まって一層身近な山になっていきます。

徳川家康は、江戸城に入ると、北東にそびえる筑波山が江戸城の鬼門にあたることから、使者を派遣して江戸城の安全鎮護を祈願したといわれます。さらに、天下を平定した後は、筑波山を徳川家の祈願所とし、知足院中禅寺に対して、寺領500石を安堵するなど、筑波山に対して優遇する政策をとりまします。

※ 鬼門：北東でうしろ(丑と寅の間)。陰陽道では、鬼が出入りする方角であるとして、万事に忌むべき方角としている。鬼門とは反対の、南西(ひつじさる)の方角を裏鬼門といい、これも忌み嫌われる。

由来は様々であるが、江戸時代には、鬼門の方角への造作・移徙(わたまし、貴人の引越は忌むべきとされ、人々は鬼門の方角に桃の木を植えたり、鬼門の反対方角が申(さる)であることから、猿の像を鬼門避けとして祀ったりした。現在でも、家の中央から見て鬼門に当たる方角に門や蔵、水屋・便所・風呂などの水を扱う場所を置くことを忌む風習が残っている。また、かつての都市計画にあつては、平城京では鬼門の方角に東大寺が、裏鬼門は植槻八幡宮が、平安京では大内裏から鬼門の方角に比叡山延暦寺が、裏鬼門の方角に石清水八幡宮が、鎌倉では幕府から鬼門の方角に荏柄天神が、裏鬼門に夷堂が、江戸では江戸城の鬼門に東叡山寛永寺が、裏鬼門に増上寺が、それぞれ置かれた。

その後、三代将軍家光の時には、幕府は中禅寺の社殿建築に着手します。資材の搬入のために、直線に近い新登山道まで切り開かせたほどに大規模な造営工事でありました。現在も当時の名残は筑波山神社への参道にある「神橋」とども、そのほかにも、筑波神社境内の日枝神社・春日神社・厳島神社・旭稻荷も家光の時代のものといわれています。

こうした幕府の取り組みは、「筑波ブーム」を引きおこし、参拝者・登山者がにわかに増え、新しい参道沿いは、宿屋・土産屋・遊郭などで繁栄を極めたということです。

また、仏教の修行場としても名高くなり、中腹一帯に日輪院・月輪院・華蔵院・大慈院などの僧坊ができ、僧侶も300人を越すほどになるなどの隆盛をみせることになるのです。さらに、中禅寺は坂東三十三方所の巡礼地のうち第二十五番札所となり、白装束の巡礼が、山を訪れました。その賑わいは目を見張るものがあつたと思われまします。

加えて、平和が続いた江戸期には、文芸活動も活発になります。かつて歌に詠われた筑波山は、俳句の世界でも格好の題材になっていきます。

俳句は室町時代に流行った連歌から分かれ、松尾芭蕉らによって大成された世界で最も短い文学です。

その芭蕉は、貞享4年(1687)年、鹿島神宮参拝の旅をして『鹿島紀行』なる紀行文を残していますが、旅の途中現在の千葉県船橋市近辺にさしかかった折、北方に筑波山をみて、「歌を詠まずにはいられないし、俳句を作らずには行き過ぎることが出来ない。まことに愛すべき山

だ。」と書き残し、弟子服部嵐雪の

雪は中さず まずむらさきのつくばかな

の句を引用して、筑波山の美しさを褒め称えました。これにより、筑波山はさらに有名になり、後世の俳人たちがこの句をまねて、筑波山を「むらさきの山」とよんだため、やがて「紫山」ないし「紫峰」の別名がつくことになったのです。

そのほか、芭蕉の弟子室井其角も江戸の両国橋に立って、

あかつきの筑波にたつや寒念仏

との一句をつくっています。この頃は今と異なり空気が澄んでいて、江戸の町なからでも、雪の翌日の青空に浮かぶ純白の筑波山や早春の霞に浮かぶ紫の山が見え、江戸の人たちは俳句をそのまま体験することが出来たのです。

遠くからの筑波山では飽きたらず、実際山に登った俳人もあらわれます。芭蕉の弟子の桃隣は、元禄10(1697)年、舟で霞ヶ浦から土浦を経て、筑波山に向かうのですが、土浦は桜の時期で、

土浦の花や手にとる筑波山

筑波山の険しい登山道では

筑波ねやすべつてこけて藤の花

の句を、それぞれつくっています。

さらに、与謝蕪村は寛保2(1742)年から宝暦元(1751)年まで、結城や下館の友人の家を転々としていたのですが、筑波山や桜川に関する俳句を残しています。

ゆく年やあくた流るる桜川

冬ざれや木々敷うべき筑波山

やや時代がさがって天明元(1781)年、句界の第一人者大島蓼太が、竜ヶ崎在住の弟子杉野翠兄に誘われ、筑波登山の旅に出ました。中腹の大御堂では、

堂高し 千手に浅り きり閑く

また、神に関わる場所では、女人禁制が普通でしたが、筑波山は女も登ることが可能だったところから、

オシの祟も かけて頼むや 筑波山

さらに、下山道の「胎内くぐり」という大岩の抜け穴をくぐって、

下用を出てこそ思へ 母の恩

の句を残しています。

そして、文化・文政期(1804〜1829)の小林一茶も、両国橋からの筑波山を、

春立つや 見古したれど 筑波山

そして、自宅の庭の垣根越しの筑波を、
スイセンやかきにゆい込む 筑波山
と、詠んでいます。

明治以降の筑波山

明治維新後の筑波山は、様子が大きく変化します。幕府が消滅してスポンサーがいなくなり、寺院の経済状況が激変したことは勿論ですが、明治維新政府の行った神仏分離令・神社制度の採用や神道優遇策が、人々の動きに大きく関わっているのです。その中でとりわけ、「排仏毀釈」の動きは見逃すことができません。神仏分離令は単に神道と仏教の分離が目的で、仏教排斥を目的にしたものではなかったのですが、全国規模で神仏習合の禁止・仏像の神体としての使用禁止・神社から仏教的要素の払拭などに発展し、ついには祭神の決定・寺院の廃合・僧侶の神職への転向・仏像仏具の破壊などが行われ、大混乱に陥りました。

さらに、明治4年(1871)寺社領上地令が発せられ、境内を除き、寺や神社の領地が国に没収されることになり、それま

でに暴力的な破壊を被っていた寺が、経済的な基盤も失うことになり、一層困窮し、荒廃することになります。多くの寺院では、仏像等が破壊されましたが、さらに経済的な理由で仏像等を売りに出す例も多く見られるようになったのです。例えば、現在国宝に指定されている奈良の興福寺「五重塔」は、わずか25円で売りに出され、薪にされようとしていたそうです。また、安徳天皇陵と平家を祀る塚を境内に持ち、『耳なし芳一』の舞台としても知られる、山口県下関の阿弥陀寺も廃され、赤間神宮となり、現在に至っているのです。筑波山も例外ではなく、戸長らを中心とした住民によって知足院中禅寺が壊され、多くの仏具や仏画が焼却され、次いで、大御堂・三重塔・十一面観音像などが打ち壊されたのです。奈良時代末から続いた寺が、僅かの日数で破壊されてしまったと言えます。

このようにして、江戸時代は特に繁栄した筑波山も火の消えたようになってしまします。そうした中、寺を壊して神社だけになった筑波山では、山頂に本殿、山腹に拝殿を設置し、「本殿と拝殿の間はすべて境内である」とし、政府の朱印地没収を免れ、山全体が神社所有とすることで、氏子である筑波の住民はその後恩恵を受けることに浴します。

中禅寺を破壊し、神社境内とすること、山は確保されたものの、その代償として多数の参拝者を失うことになりました。それまでの参拝者は、千手観音のご利益が目当てでの登山者だったのです。宿屋・茶屋なども登山客の減少に伴い、廃業に追い込まれることも多く、あれほど繁栄した筑波山もあつという間に寂

れてしまします。それでも、明治6年(1873)年には、江戸屋の主人が洋式旅館(当時の人たちは「オランダ屋敷」と呼んだという)を完成させたり、明治12(1879)年には戸長らが中心になって大御堂跡で「全国大博覧会」を開いたりして、集客のための努力が続けられました。これらは、物珍しさも手伝って一時的には登山客が増えました。しかし、すぐにまた、山は寂れる一方になってしまふのです。

そうした中、明治35(1902)年、筑波山頂に気象観測所「山階宮筑波山測候所」(明治44年、中央气象台付属筑波山観測所となる)が設置されました。その後も、大正7年に筑波鉄道の開業、大正10年に筑波山微動観測所(後、東大地震研究所筑波山支所)の開設、大正11年に中腹までの自動車道路の開通、大正12年に登山バスの運行開始、大正14年にケールカーの開通、さらに、昭和21年に山頂にNHK技術研究所自動中継所の開設、昭和27年に電々公社の筑波無線中継所の設置などが続き、信仰の山が、科学の山へと脱皮することになります。それに伴い、筑波への登山客も、かつてほどではないにしても、増加の傾向を示していくのです。特に、大正7(1918)年の筑波鉄道の開業は、筑波山にとって大きな出来事で、最盛期を迎えた昭和30年代後半からは、土浦駅・筑波駅間には急行列車も運行され、行楽シーズンには上野駅や日立駅から国鉄の客車列車が筑波駅まで乗り入れるほどの賑わいであつたといわれます。

しかし、その後、モータリゼーション化の進行などにより筑波鉄道の乗客は急減し、昭和62(1987)年に、国鉄分割

民営化と時を同じくして、筑波鉄道は廃止されたのです。その間、筑波山では、自家用車利用者のための道路の整備や駐車場の設置につとめ、ある程度の観光客は確保してきました。しかし、自動車の小回りの利く便利さゆえか、宿泊を伴う登山客の減少傾向に歯止めをかけるまでには至りませんでした。

このように、筑波山は様々な歴史をたどってきたのですが、1960年代からは、その南側山麓一帯で筑波研究学園都市としての開発が進み、昭和62(1987)年には筑波郡谷田部町・豊里町・大穂町・新治郡桜村が合併して、つくば市を誕生させました。そして、翌年に筑波町、平成14(2002)年に稲敷郡茎崎町が編入され、現在のつくば市になります。すると、その北端に位置する筑波山を中心とした観光再開発の動きがにわかに活発化します。特に、平成17(2005)年の「首都圏新都市鉄道」いわゆる「つくばエクスプレス」の開業が、この動きに拍車をかけていきます。つくば市の中心部と東京都市心が45分で結ばれたことで、この利便性を生かしての観光振興に、地元住民が寄せる期待は大きいものでありました。

つくば市では、社団法人つくば観光コンベンション協会を中心に観光事業を展開し、平成19年度は380万超の人が、筑波山を含めつくば市を訪れています。協会では、様々なイベントを開催するとともに、筑波山麓観光周遊バスの運行、筑波山ビジターセンター「自然のひろばを」の運営(無料)、筑波山観光ガイドツアー(無料)の活動などを通じて、更なる観光客の誘致に力を入れているところと言えます。(了) (高21回卒 鈴木義人)

←
埼玉県飯能市にある標高 770m の高台「関八州
見晴台」。常陸・安房・下総・上総・上野・下野・
武蔵・相模の関八州が見晴らせます
(「関八州見晴台 MAPPLE 観光ガイド」より転載)

校歌に謳われた「関八州」

本校校歌に登場する「関八州」のフレーズ。この言い回しは、深い歴史の重みを感じさせる表現と言えるのかもしれませんが。言うまでもなく、「関八州」は「関東八州」の略です。しかし、この「関東」（「関所の東側」の意味）の名称が指し示す地域は、時代のときどきで大きく変わってきたからです。今号では、古代・中世・近世における「関所」の役割を紐解きながら、「関東」・「関八州」について考えてみます。

関東・関八州

古代・律令制が構築された飛鳥時代後期から奈良時代にかけて、「関東」という地域概念が発生します。この時期に畿内を防御するため、東海道の鈴鹿関・東山道の不破関・北陸道の愛発関が設置されますが、これら三関から東を「関東」と呼んだのです。したがって、当時は「関東」は、「東国」とほぼ同義で使われていたようです。

平安中期になると、愛発関に代わり逢坂関が三関に加えられますが、関東の地域範囲には、大きな異同はなく平安末期まで続くことになります。

平安末期に、源平争乱を制した源頼朝が朝廷から自立した政権を鎌倉に樹立すると、自らの政権を「畿内近国・西国方」に対して「関東方」と称し、ほどなく「関東」は、頼朝政権の鎌倉幕府の公式な呼称として定着していきます。幕府成立後の「関東」が示す地域範囲は、律令以来の関東ではなく、遠江国・信濃国・越後国以東となりますが、これは鎌倉幕府の支持基盤で、かつ朝廷から公認された直接統治範囲でした。こうして「関東」は、鎌倉幕府そのもの及び鎌倉幕府が直接に統治権を及ぼす地域の二つを表す言葉に変化していきます。

14 世紀に成立し、鎌倉幕府の正史とも言えるべき『吾妻鏡』には、「関西三十八カ国、関東二十八カ国」との記述があり、今日の「東日本」全体を指す意味でも用いられるようになります。

やがて室町幕府が成立すると、鎌倉に「鎌倉公方」鎌倉府が設置され、鎌倉公方の管轄する諸国を指すようになり、

※ 五畿七道

律令制度下の行政区分で、都周辺の五国（大和・山城・和泉・河内・摂津）を畿内、それ以外の地域を山陽道・山陰道・西海道・南海道・東海道・東山道・北陸道の七つに区分したものが七道で、それぞれに含まれる各国の国府は、同名の幹線官道で結ばれていました。明治以降も継続して使われ、新たな地域（蝦夷地）は北海道と称されるようになり、明治中期以降はあまり用いられなくなったものの、北海道だけは今日の都道府県制にも引き継がれています。

※ 五畿七道内の諸国

古来大八洲六十余洲という表現がよく使われますが、八島（八洲）とは、『古事記』でいうところの日本で、本来多くの島からなるという意味でしたが、主に本州・九州・四国・淡路・志岐・対馬・隠岐・佐渡の 8 つの島の総称として使用されたものです。その日本は、やがて五畿七道に区分され、七道内には国が配置されます。国名は、関八州でいうと東海道に属した相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸、東山道の上野・下野がそれで、全国で 60 余りになったのです。ただし、本来の数はもっと少なかったのですが、大きな国は分割され新たに国名が付けられていきます。例えば、総の国が上総・下総に、毛野の国が上野・下野に、関八州以外では、吉備の国が備前・備中・備後、越の国が越前・越中・越後などがあります。その際、幹線官道沿いで都に近い方が「上」であったり、「前」と表現されました。

坂東とも呼ばれてきた相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野の 8 カ国に、伊豆・甲斐を加えた 10 カ国が「関東」と認識されるようになっていきます。そして 14 世紀末に陸奥・出羽国が鎌倉公方の管轄下に入ると、奥羽もまた「関東」と称されることにもなります。時代が下り、江戸幕府が成立すると、「関東」の概念は、また変化することになります。江戸を防御するための箱根・

小仏・碓井の三関より東の坂東 8 カ国が、「関東」と呼ばれるようになったのです。幕府では公式には奥羽も「関東」に含むとしていたのですが、「関八州」の概念が生じ、一般的には旧来の坂東 8 カ国が「関東」と認識されていきます。

古代の三関

古代に愛発・不破・鈴鹿の三関が設けられ、9 世紀初頭に逢坂関が愛発関に代わったことは前述のとおりですが、これらの「関」についてさらに述べてみます。

三関には、鼓吹軍器（兵器類）が常備され、城主と呼ばれる役人が常駐する体制がとられ、非常事態に備えていました。小紙第 58 号で触れた常陸国府に付随した遺跡である鹿の子も、「関」ではないものの蝦夷征討に関連した軍事施設で、軍事的な工房を有していました。三関にもこうした施設も含まれていたものと考えられます。非常事態が発生すると、朝廷は三関に固関使（こげんし）を派遣しますが、蔵司が保管する関契という割符の左符が固関使に与えられ、三関で国司によって保管されていた右符と照合します。これが一致すると非常事態と認定され、関が閉鎖されるのです。これを「固関」といいます。関を閉鎖するのは東国から畿内への侵入を防ぐためですが、逆に中央の謀反者等の東国への逃亡を防ぐという目的も持っていました。天平宝字 8（764）年の藤原仲麻呂の乱の際は、愛発関を閉鎖することにより仲麻呂が息子のいる越前国へ逃げることを防いだといわれています。

三関の設置時期は、天武天皇元（672）年とされますが、その前後の壬申の乱で



→
復元された箱根
御関所（『よみが
える箱根関所』
HP より転載）



は、大海人皇子(後、天武天皇)が初動で不破道を塞ぎ、優位に立ったことが知られています。そして文武4(700)年にほぼ完成したとされる大宝令には、三関が警察・軍事の機能を兼備することが規定されます。

その後、養老5(722)年の元明天上天皇の崩御に際し、初めて固関が実施されました。また、天皇・太上天皇の病氣・崩御、長屋王の変・藤原仲麻呂の乱・薬子の乱などの争乱でも、固関使が派遣されています。延暦8(789)年になると、桓武天皇の勅により、三関が突然停廃されますが、完全に放棄されたわけではなく、その後も「関」として機能し、しばしば固関が行われていくのです。

愛発関あらちのせき…北陸道近江国と越前国の国境に置かれた。現福井県敦賀市足田ないし同市道口とされます。

逢坂関おうさかのせき…山城国と近江国の国境に設置。現滋賀県大津市石山寺付近と考えられます。

不破関ふわのせき…東山道美濃国に置かれ、現岐阜県不破郡関ヶ原町松尾とされます。

鈴鹿関すずかのせき…伊勢国にあった東海道の関。現三重県亀山市関町新所とする説が有力です。

中世の関所

中世の室町時代には、足利幕府が一応は存在するものの、その基盤は脆弱と言えるものでした。そのため、各地に有力な勢力が分立するようになり、やがてそうした勢力が覇を競う戦国時代を迎えます。その契機となるのが、応仁元(1467)年から約10年にわたって繰り広げられた応仁の乱です。戦乱が続く世は、暗い

時代”と思われるがちですが、政治的な混乱の渦中にあっても、一般民衆はしたたかに生き、その様子は、古今東西の各地に見られるところです。わが国の15・16世紀も全く同じで、戦乱の世情ゆえに旧来の制約から解放され、人々の活動は自由闊達になり、人や物資の動きが、それまでもまして活発になります。

日本では、このような時代に、各所に「関」が設けられることになります。そして、その関は前代までの軍事的な意味は全く持たないものでした。それは、室町幕府やその地域を支配する勢力が財政を補うため設置したもので、関を通過する人や物に対して通行税を課すものだったからです。それは次のような例に見られます。

*** 京・大坂間の淀川筋に600余の関所設置**

*** 奈良興福寺の僧尋尊の使者の旅**

文明11(1479)年奈良から美濃まで通貨関所290 関銭・渡賃1貫496文
当時の米価は1石が約700文です
ので、関銭・渡賃は米約2石分に相当します。現在の米価は1石が、生産者段階では約3万円、消費者段階では約7〜8万円に当たりますので、かなりの金額と言えます。

しかし、戦国時代も後半になると、各地の戦国大名が領国の一円支配を強めることで、多様な主体が設置していた関所は減少していきます。そして信長・秀吉の統一事業の進展により、ほとんどの関所が廃止されていくことになります。

近世の関所

関ヶ原の合戦に勝利し天下統一を成し遂げた徳川家康は、征夷大將軍として

江戸に幕府を開き、間もなく將軍職を子の秀忠に譲ると、大御所として政權の確立のため様々な政策を実施していきます。

その中の一つが江戸を中心とした街道の整備です。三代將軍家光の頃までには、東海道・中山道・奥州道中・甲州道中・日光道中の五街道をはじめとして、その他の脇往還といわれる道筋が整えられます。その際、旅の利便を図る意味もあつて、一里塚や並木などが設けられるとともに、約10 kmごとに宿場が設置されました(東海道は「東海道五十三次」といわれ、江戸・京間約500 kmに53の宿場が存在しました)。同時に、江戸防衛のための策として、河川に架橋されないところも多くあつたり、各所に関所が設置されたりして、人の往来を制限・監視する政策も採られています。

関所は、関八州内およびその周辺地域に50余カ所が設けられます。そのうち特に重要とされたのが、東海道では、相模の箱根と遠江の今切(通称、荒井、後に新居)で、中山道では、上野の碓井と信濃の木曾福島の4カ所です。こうした関所では、「入鉄砲に出女」を特に監視したとされます。つまり、江戸に居住することを強要された大名の妻女等が密かに江戸を離れ国元等へ向かうことと、鉄砲をはじめとする武器が関八州・江戸に持ち込まれることを監視したのです。

そうした一方で、橋のない川では、渡船が主になりますが、それすら許容されない川があり、そこでは川越人足の出番となります。大井川の例で言えば、股通・帯下通・帯上通・乳通・脇通の五段階の水量区分があり、股下で48文から

脇までの水量で94文までの料金が必要でした。現在の金額で言えば、おおよそ150円から300円とかなり高額でした。これが、人足の肩に乗っての川越で、他に輦台(連台)での渡しがありました。これはさらに高額で、最低でも肩車の6倍の料金が必要でした。そのため、当時の旅人にとっては、川越は大変な負担だったのです。加えて、水量が脇(腋)以上になると、川止めになり、兩岸の宿場に滞在し川止め解除を待たなければなりませんので、負担は一層かさむことも余儀なくされるのです。そのため、

箱根八里は馬でも越すが

越すに越されぬ大井川
などと言われたのです。

大井川のような川は、東海道筋では、大井川と同じ駿河の安倍川、相模の酒匂川・興津川があり、まさに江戸防衛の重要な役目をしていました。

箱根関所…東海道の芦ノ湖畔に設置され、幕府が最も重視した関所で、後に、箱根は主として出女を、今切が入鉄砲を監視するように役割分担が定められます。平成19年に関所は復元され、往事の姿を今に伝えています。
今切関所…東海道の浜名湖西岸にあり、当時の関所建物としては唯一現存します。

碓井関所…現在の群馬県安中市松井町横川にあり、東門が復元されています。

木曾福島関所…碓井関所と同様、中山道にあり、元来妻籠宿にあった番所が木曾福島に移転したものとされています。

このように、幕府、その中心地の江戸、さらには幕府の根拠地ともいえるべき関八州を、防衛するための重要政策として、河川に架橋しないことや関所の設置があつたのです。(高21回卒 鈴木義人)

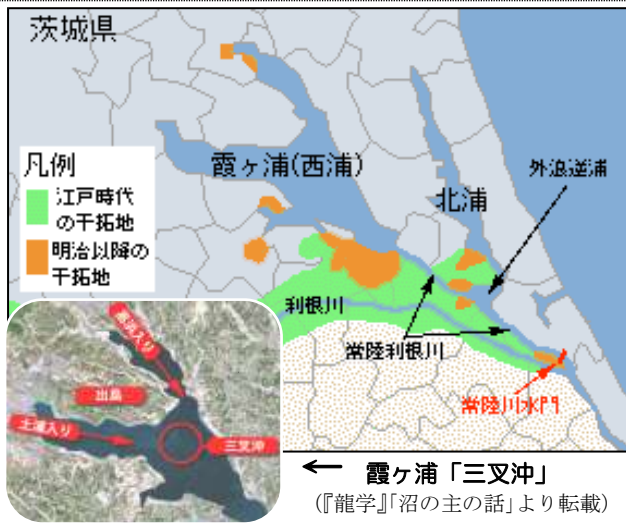


「霞ヶ浦」全国 (『ローリング
ウエスト逍遙日記』より転載)

霞ヶ浦 (その1) ～流海～

校歌に歌われている霞ヶ浦。遠浅で広い海跡湖 (もともとは海の入江であったところが残ってできた湖) ですが、満々たる水をたたえ、人々に豊かな恵みと安らぎを与えてきました。

今回から霞ヶ浦とその周辺の人々の歩みをたどっていきます。



← 霞ヶ浦「三叉沖」
(『龍学』「沼の主の話」より転載)

地理

霞ヶ浦は、わが国第二の大きさをもち淡水湖で、面積は220^{km}₂。西浦(172^{km}₂)、北浦(36^{km}₂)、外浪逆浦(6^{km}₂)、常陸利根川(6^{km}₂)の4つの水域から成り立っています(「霞ヶ浦と北浦」などと表現される場合は、「霞ヶ浦」は事実上西浦のみを指しており、「霞ヶ浦」という名称は2つの意味で使われています)。周囲(水際線延長)は249.5^{km}に及んでいますが、これは日本最大面積の湖である琵琶湖(235.0^{km}₂)を超える長さです。狭義の「霞ヶ浦」である西浦は、面積では全体の78%余りを占め、土浦方面に伸びる水域を「土浦入」、石岡方面を「高浜入」と呼び、両者が交わるかすみがうら市沖の広い水域を「三叉沖」と呼んでいます。水深は浅く、大部分が3mから6mで、平均水深4m、最大水深は西浦の三叉沖で7.1m、北浦で10mにすぎません。霞ヶ浦には、桜川・恋瀬川・巴川・小野川など、56の河川が流れ込み、年間流量量は約14億^m₃、貯水量は約8.5億^m₃、その流域には約100万人の人々が暮らしています。その水面の標高は0m、湖岸の台地もせいぜい30m位で、日本第一の湖、琵琶湖と比べると、低平なところが特色で、独特の水郷景観を見せています。この景観を保立俊一氏(中31回卒)は「多くの人が霞ヶ浦の美について言っていることは、霞ヶ浦は水平の美である。周辺に山の無い霞ヶ浦の広漠ともいえる横に広がる景観にはすべての人をつつみこむ広い心を感じる。その広がり、霞ヶ浦の水平の美である。朝に夕に穏やかな光の中に広がる水面をみつめる時、その広さの中に心の安

らぎを感じるのには私ばかりでは無いと思う。」と述べています(『水郷つちうら回想』保立俊一著 筑波書林 1994(平成6)年刊)。

流海

霞ヶ浦の名称が定着するのは江戸時代であり、『常陸風土記』では「流海(ながれうみ)」「海水が流動していたところからこのように呼ばれたのだと思われ(ます)」と呼び、稲敷市側は「信太の流海」、かすみがうら市東部は「佐賀の流海」、行方市側は「行方の海」、利根川流域の低地は「榎浦(えのうら)の流海」と称しています。鎌倉時代に入ると和歌などでは「霞の浦」と詠んでいます。一般には、鹿島灘の「外の海」に対して、巨大な入り江、「内の海」と呼ばれていました。沿岸に遺された無数の貝塚(その数は関東地方全体の約30%といわれています)は、海水・淡水産など様々な貝殻が堆積し、寒冷化に伴う海退・淡水化と、温暖化に伴う海進・鹹水化がくり返されたことがうかがえます。上高津貝塚や陸平貝塚等の縄文時代の貝塚の分布から、当時の海岸線を推定できますが、それによれば霞ヶ浦の面積は現在の2倍を超え、稲敷市(旧東村)低地以南のいわゆる榎浦や潮来以南の浪逆浦(なさかうら)、それに北浦とも、とくに区別なく接続するので、全体としては琵琶湖に匹敵する広さであったことがわかります。

常陸国内の縄文時代の貝塚からは、豊富な魚介類を示す遺物が多数出土しており、はるか昔から水産物に恵まれた環境であったようです。貝塚から発見された釣り針やヤス・鈎(モリ)・球状土錘

(魚網を下方に引っ張り、水中で所要の形状を保たせるために用いられるおもり)などの漁具は、材質は違うものの形態は今のものと大差がなく、釣り・刺突・網・わなといった現在と同様な漁法が行われていたことが分かります。



上高津貝塚では、復元された「竪穴住居」(上)、「製塩土器」(右上)、さらに海水を土器で煮詰めて塩をつくった「大型炉」(左)も見ることができます

また上高津貝塚から出土した製塩土器などから、縄文時代後期(約3千年前)には霞ヶ浦で塩作り(日本で最初の塩作りかもしれません)が始まっていたことが分かります。当時の塩作りはまず塩分が付着した海藻を天日干しにし、さらにその海藻に海水をかけて濃い塩分を付着させます。その海藻を塩づくりのために底が尖った土器(製塩土器)で煮詰めて、結晶となつて付着した塩を取るものでした。さらに時代が下つて、713年頃編纂された『常陸国風土記』の信太郡の条には、「浮島の村の人々は塩を焼いて生活をしている」とあり、行方郡の条には「行方の海の津済(わたり)周辺には塩を焼くための海藻が生えている」など

と、当時の霞ヶ浦沿岸地域では塩づくりが行われていた様子が記されています。こうした塩作りの事実から霞ヶ浦が8世紀の初め頃でもまだ鹹湖（かんこ）塩水湖、湖水の塩分が、1リットル中0.5グラム以上の湖）であったことは間違いありません。

東海道駅路

古代律令制時代の幹線道路である東海道駅路は下総国を経て、常陸国に入ります。『常陸風土記』（信太郡条）は使者たちが下総国から常陸国に入る際に、ついで次のように記述しています。

「榎浦津（えのうらのつ）あり、便（すなわ）ち、駅家（うまや）を置けり。東海道にして、常陸路の頭（はじめ）なり。所以（このゆえ）に伝駅使等（はゆまづかいら）、初めて国に臨まむとするに、先（ま）ず口と手とを洗ひ、東に向きて香島（かしま）の大神を拝（おがみ）みて、然（し）こうして後に入る可得。」常陸国の玄関口には榎浦津という駅家があったこと、駅路が「東海道」と呼ばれたこと、常陸の国府（石岡）に向かう使者はここで口や手を洗い、東へ向いて香島の大神すなわち鹿島神宮を遙拝してから常陸国に入ったことなどが書かれています。津（港）の駅なので、船が停泊できる水辺近くに駅家があったことがうかがえます。

この信太郡の榎浦津駅は稲敷市柴崎地区にある新宿遺跡周辺が有力な候補地と考えられています。ここから先のルートについては、陸路を経て霞ヶ浦を船で渡り常陸国府に向かうコースが、かつては想定されていました。しかし、歴史地理学の木下良氏が空中写真と地形

図などから稲敷市下君山から阿見町飯倉までの直線道が東海道駅路にあたることを見出し、常陸国府まで陸路であったことを明らかにしました。つまり、榎浦津駅で常陸国に入った東海道駅路は、稲敷市、牛久市、阿見町を通り、土浦市の小松・高津付近にあったとされる曾禰（そね）駅へと続いていました。さらに桜川を渡り、土浦市中貫から、かすみぐら市市内を抜け、国府のある石岡市（国衙の正庁が石岡小、国分尼寺が府中小付近に建てられていました。国分寺の跡には現在も国分寺というお寺が建っています）に到りました。緊急時には早馬を駆け、すばやく情報を伝達することが駅路の重要な機能の一つであり、気象条件などに左右されやすい水路より、目的地まで最短距離で結ぶ陸路が重視され、直線道が造られたと考えられます。



古代の道路体系と東海道駅路
（『花見川流域を歩く』より転載）

海夫（かいふ）

平安時代末期から室町時代にかけての香取神宮文書や鹿島神宮文書には「海夫」とよばれた人々が記されています。

海夫は、12世紀後半には登場して、霞ヶ浦の津々浦々で漁業を主とし、水上交通・商品輸送など操船の技術を生かし舟運なども生業としていました。

古代の律令制は、海を山川敷沢（さんせんそうたく）などの未開地と同じように、特定の人が独占すべきものではなく自由に利用できるものとし、養老令で「山川敷沢の利、公私之を共にせよ」と規定しています。しかし平安末期から南北朝時代にかけては、香取神宮や鹿島神宮の大禰宜に海夫たちの網や船へ課税する権利が与えられ、海夫たちは香取神宮や鹿島神宮に一種の年貢である祭祀料を献納し、そのみかえりとして漁業や水運などの特権を与えられ、「津」という港を拠点として、活動をしていました。しかし、南北朝時代に入ると、津は在地領主の支配下に置かれるようになり、1374（応安7）年、室町幕府は海夫を各在地領主から大禰宜の支配に戻るように命じています。香取神宮大禰宜中臣長房が起草した「海夫注文」（海夫たちから徴税をするための目録）は、平安以来、諸津から徴収されていた海夫税（通行税・船税）が、南北朝の混乱期に在地領主の支配が進んだ結果、未・滞納の続出で起こされた訴訟の証拠書類として提出されたもので、中世港湾（津）の分布を知る好資料となっています。そこには常陸の50余津、下総の24津が列記され、記載のないものも含めれば、沿岸には優に80を超える津の存在が推定できます。

しかし平安末期、律令制の崩壊とともに、領主の支配権が強化され、香取神宮や鹿島神宮の統制が弱まるにつれて、津



かつては海夫が活躍した現在の古渡の町（上）、「海夫注文」も含まれた「香取神宮文書」（右、千葉県歴史資料館蔵）



も次第に自衛のための連合組織を形成し、霞ヶ浦・北浦を津の入会（共同利用地）の海として管理する「霞ヶ浦48津」・「北浦48津」に発展し、地名を今日に残すものも多く、比定地の特定も進んでいます。霞ヶ浦48津のほとんどは霞ヶ浦に注ぐ河川の河口に位置し、周辺には農業基盤となる小沖積地を伴い、城館や寺院が営まれていました。

この頃から、常陸国では、平将門の乱を制圧した平貞盛の一族であった多氣氏が常陸国府の大掾職を世襲し、その職名を名字（常陸大掾氏）として勢力を拡大していききましたが、鎌倉時代に入ると、小田城を拠点にした小田氏が台頭し、大掾氏に代わって筑波山麓霞ヶ浦周辺に一大勢力になっていきました。

（高21回卒 松井泰寿）

【参考資料】

『理想郷とよばれた常陸国』 2013・8

『帆曳網漁の世界展示解説書』 2005・7

『古代のみち〜常陸を通る東海道駅路〜』（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）

「霞ヶ浦四十八津」全図

(下、『帆曳網漁の世界展示解説書』より転載)



霞ヶ浦四十八津の一つの現在の土浦市沖宿。水平線上の左に土浦市街地、右に筑波山が見えます



霞ヶ浦（その2）～霞ヶ浦四十八津～

南北朝時代以降、霞ヶ浦の周辺地域も戦乱のなかに巻き込まれていきましたが、ようやく徳川の世になって、人々の生活も落ち着きを取り戻してきました。しかし、幕府や諸藩は財政立て直しのため、各漁場からの営業税の徴収を企てました。これに対し、四十八津の漁民たちは、掟書を定め、お互いに資源を守り、漁業権を認めさせようとしてしました。

内 海

湖には古くは統一した名称はなく、信太流海とか香澄流海のように、部分的な名称しかありませんでした。「霞の浦」という統一した名称は平安時代のころからで、「霞ヶ浦」となったのは近世に入ってからです。「かすみ」の語源は種々説がありますが、行方郡香澄郷の「かすみ」の名称が、湖水全体の名称になったものと考えられており、鎌倉時代に入ると、霞ヶ浦は和歌などで「霞の浦」と詠まれるようになりました。

春がすみ霞の浦をゆく舟の

よそにも見えぬ人をこひつつ

（藤原定家）

ほのかにも知らせてしかな東なる

霞の浦のあまのいさり火

（順徳院 新後拾遺集）

しられしな霞の浦に漕ぐふねの

ほのかにかよう心ありとも

（花園天皇 新統古今集）

いづれも「霞の浦」となっており、霞たなびく浪静かな湖の風情が感じられます。

しかし南北朝時代に入ると、霞ヶ浦周辺も動乱の渦に巻き込まれていきます。

南朝方の北畠親房が関東地方に南朝勢力を拡大するために、¹³³⁸（延元3）年

8月、義良親王（のりよし）の後継に即位して後村上天皇を奉じて、伊勢大湊

（三重県伊勢市）を出帆、船団は東国に向かいましたが、途中、大風にあい船団

はちりぢりとなり、義良親王は親房の子顕信とともに伊勢に吹き戻され、親房ら

は単独で常陸国・内の海に漂着しています。親房らが上陸したところは信太郡東



1338年、東条荘に上陸した北畠親房が一時入城した阿波崎城址（左上）。阿波崎城が落城すると、親房に協力した近郷の名主13名は、北朝方の佐竹勢により斬首されました。外出中で、難を免れた阿波崎名主根本六左衛門は、盟友らとの信義を貫き、引き上げようとする佐竹勢を「ホーイ、ホーイ」と呼び止め、進んで処刑されたといわれ、その供養のために信太古渡に「ホイホイ地蔵」が建てられました（右上）、北畠親房肖像画（左下、『茨城県立歴史館HP』より転載）



条荘で、神宮寺城（稲敷市神宮寺）や阿波崎城（稲敷市阿波崎）を拠点に、北朝方と戦いましたが、ともに落城し、小田治久に迎えられて小田城に入りました（親房は、この時期に小田城や関城で『神皇正統記』や『職原抄』（有職故実書、日本の官職の沿革を漢文で記述）を執筆しています）。親房の内の海への到着や、小田城への転進については海夫たちの援助があったものと思われま

す。戦国時代の霞ヶ浦周辺では、小田城の小田氏、守護の佐竹氏、関東管領の上杉氏、古河公方の足利氏、そして後北条氏が覇権を争いましたが、北方の佐竹氏が勢力を南下させ、¹⁵⁹¹（天正19）年に佐竹義宣が周辺地域を掌握し、秀吉の全国統一の時代を迎えました。秀吉とは友好

関係にあった佐竹義宣は、霞ヶ浦北岸を

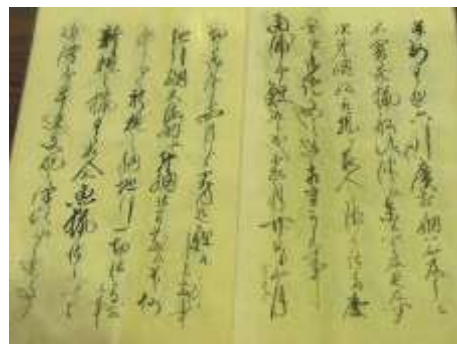
霞ヶ浦四十八津掟書

含む常陸国54万石の領有を認められ、行方・鹿島の33館を滅ぼし、弟の芦名盛重を江戸崎城主としました。しかし¹⁶⁰⁰（慶長5）年の関ヶ原合戦のとき、徳川家康方に味方をしなかったばかりか、家康に敵対した上杉景勝との同盟が発覚し、秋田の久保田城に左遷され、芦名盛重も所領没収となりました。

その後、家康は東北地方の外様の雄藩に対抗するために、子息（武田信吉、徳川頼宣、徳川頼房）を水戸に封じました。その結果、霞ヶ浦北岸一帯は、概ね水戸藩領（麻生付近は新庄氏領、その他石岡藩・守山藩・若干の天領・旗本領を除く）に入り、湖南地方も芦名氏のあとは天領あるいは旗本領が複雑に入りこみ、その間に土浦藩領・仙台藩領等が加わり、かすみがうら市方面では、土浦藩領と水戸藩領が境を接し、それが幕末まで続きました。

霞ヶ浦の漁業権は「津」を拠点とする海夫の特権でしたが、徳川幕府は浮島付近に専用漁場を設け「箕和田御留川」としました。また、水戸藩もその領内である高浜入りに専用漁場を設置できるように幕府に要請し、四十八津側の猛反対にもかかわらず、¹⁶²⁵（寛永2）年、「玉里（水戸）御留川」として実現しました。当時水戸藩は、財政的に苦しい時期であったために、御留川を設定して、改めてそこで漁業を行う特定の人々から権利金や税金を徴収して、藩財政を潤す一事業としました。水戸御留川の運営は、御直網（藩直営の漁業）と入札運上（一番高く入札したものに営業権を与え運上

金を課する)の2通りで行われました。当時の文書には11カ年の御直網で2000両(変動相場制のため確定はできませんが1両=5万円とすると1億円、単年度にすると2000万円)の利益があがったと記されています。



1650(慶安3)年に成文化された「霞ヶ浦四十津掟書」。これには「一 霞ヶ浦は、四十八津の入会で、ここでの漁業は従来通り行う。また、鯉の漁期は11月20日より翌年3月までで、4月から11月までは禁漁とする」といった規則が書かれています(『土浦の自然』より転載)

さらに湖畔に領土をもっている土浦藩や麻生藩なども、支配地の地先の漁場から運上(一種の営業税)を徴収しようという気運が高まり、四十八津側の「湖は入会」とする主張は通らなくなりました。このような状況下で、四十八津の名主が集まって協議のうえ、漁業を権利として認め、規制を定めて、お互いに資源を守るために、1650(慶安3)年に掟書が定められました。その内容は、漁期や漁法の制限、掟を破った場合の処罰措置や救助活動などについて申し合わせをしており、漁業権を認めた最初のものと言えます。この掟書はその後、1726(享保11)年、1741(寛保元)年、1815(文化12)年と3回にわたって議定が行われ補則されています。四十八津の中に田村、沖宿、大岩田の名が見えますが、土浦あるいは東崎の名はなく、土浦の漁民

はまだあまり多くなかったようです。

こうして江戸時代の霞ヶ浦における漁業は、この掟書によって種々規制が行われていましたが、享保期を境として一村ごとに地先水面を、それぞれの領主に運上金を納め、運上場とすることによって、「村の漁場」が定められ、四十八津の伝統的な力は失われていきました。またこの掟書によると、その頃の魚類は鯉・エビ・イサザ(アミ)などが主で、生魚のままか、干し魚として販売されていました。ワカサギなども生魚のままか干し肥料として販売されていたようです(ワカサギを漢字で「公魚」と書くのは、麻生藩が將軍家に焼きわかさを献上し、公儀御用魚とされたことに由来します)。

利根川東遷事業

江戸期には、幕府の利根川東遷(とうせん)東へ移すこと)事業により、霞ヶ浦・銚子から利根川・関宿・江戸川を経由し、江戸へと至る、関東の水運の大動脈が開通しました。その結果、霞ヶ浦周辺の産物を江戸へ送る輸送の幹線ルートとなり、東北地方から江戸への物資輸送のルートとしても利用されるようになります。霞ヶ浦の土浦・高浜・木原・麻生、利根川筋の佐原・木下・守谷・境、鬼怒川筋では水海道・石下・宗道・結城など、各河川筋に河岸(かし)川の港町)が開かれ、水運とともに栄えました。また土浦・野田・銚子の醤油、石岡・石下・佐原の酒、流山の味噌(みそ)、猿島のお茶、結城の紬などの産業も発達しました。「霞ヶ浦舟運」等については小紙52号で詳述しています)



利根川東遷(上、『国土交通省』より転載)。天明3年の浅間山大噴火によりできた「鬼出し園」(右、『川越観光ブログ』より転載)



一方、霞ヶ浦や利根川沿いの低湿地の開発は、近世になってから大々的に進められました。特に、利根川東遷事業に伴って、鬼怒川や小貝川下流域、新利根川の開削とその周辺の新田開発などが大規模に行われていきました。

水運や開発という恩恵を霞ヶ浦周辺にもたらした利根川東遷事業でしたが、1783(天明3)年の浅間山の大噴火が、一つの転機をもたらしました。集落を全滅させるなど、死者2〜3万人を出したこの噴火による大量の火山灰は、天明の大飢饉の一因となったといわれていますが、同時に、利根川の河床を堆積によって急激に上昇させ、利根川(特に江戸川分岐点より上流)の水害を激化させるに至ったのでした。このため、幕府は、江戸川への流入量の制限や川の拡幅によって銚子方面へ流れる水の量を増やす工事を行いました。この工事の結果として、今度は、霞ヶ浦をふくむ利根川下流域に洪水を追いやり、水害を深刻化させる原因となりました。また、火山灰の河床への堆積を招いて海水の流入を妨ぐとともに、河川改修による利根川上流

からの堆積量の増大も霞ヶ浦へ流入する海水を少なくすることになりました。さらには、当時、海面が低下していたことも、一層の淡水化を促すものとなりました。これらの結果、生息する魚介類も海水から汽水・淡水に生息するものへと変化し、漁業も現在のものに近いワカサギやコイ・フナなどを対象とするものが定着していったと考えられています。その後、明治時代まで、利根川の「主流」は確定していませんでしたが、足尾鉍毒事件の発生によって、霞ヶ浦や銚子方面を利根川主流とする方針が明確になりました。この方針は霞ヶ浦の治水対策を強化していくこととなりますが、昭和13年の洪水」といわれる霞ヶ浦の近代治水史上最悪の大洪水や「昭和16年の洪水」といわれる大規模洪水により、昭和14年に始まった利根川増補計画の教訓となり、のちの治水事業にも引き継がれていきました。(高21回卒 松井泰寿)



昭和13年の大洪水のときの土浦市。水没した港町(上)。現ファーマーセンター(下)。中央店交差点前の出水状況(いずれも写真真記録茨城20世紀)より転載)



【参考資料】

『理想郷とよばれた常陸国』

(かすみがうら市郷土資料館

2013・8)

『帆曳網漁の世界展示解説書』

(かすみがうら市郷土資料館

2005・7)